

VIEWnext

学校の今に寄り添い、先生方とともに未来を描く

〔ビューネクスト〕高校版

2024 **2** February

特集 学習意欲の向上

—— 学びの志向を捉えて
教育活動をデザインする

表紙の学校
大分県立
大分上野丘高校



指導変革の軌跡

東京都・私立神田女学園中学校高校

発問・課題設定をキーに見る
主体的・対話的で深い学び 授業実践

英語・数学 (教科横断型)

岡山県立岡山一宮高校 三尾健一／有岡桂佑

ウェブサイトVIEWnext ONLINE
<https://view-next.benesse.jp/>



先生なら、 どうしますか？

教師は、生徒の「どうあるべきか、どう生きていくか」という答えが1つではない問いに、生徒とともに日々向き合う。教師としての指導観を問われた「あの瞬間」を、当事者の教師が振り返る。

親や社会に対して憤り、
教師にも反発する生徒に、
「文句だけでは変わらない」と
差し出した手帳

福井県・私立福井南高校 浅井佑記範

あさいゆきのり●同校に赴任して11年目。進路支援部。
地理歴史・公民科、情報科。
テレビ局の記者職を経て、高校の教壇に立つ。
生徒と社会をつなげるため、
「総合的な探究の時間」での生徒との時間を
特に大切にしている。



中 学3年次に不登校を経験し、高校でも教師の指導に「うるせえ」と反発する。そんな女子生徒Aさんに担任ではない進路支援部の私がかかわることになったのは、1年次秋の進路面談からでした。大学進学者の割合が約1割の本校では、大学進学希望者の面談は進路支援部が引き受けていたのです。

父親と面談に臨んだAさんは、希望進路として他県の私立大学を挙げました。ところが父親は、「大学には行かせない。働いてもらう」と娘の進学を否定。取りつく島もない態度の父親を、私は「少し話を聞いてみませんか」などと諫めることもできませんでした。涙目のAさんに私ができたことは、大学で専攻したいという生活科学に関する本を「読んでみたら？」と紹介することくらいでした。面談後、私は「Aさん、落ち込んだだろうな。ますます荒れるだろうな」と悶々としていました。

翌週の月曜日の朝、進路相談室にAさんが来ました。予想外の訪問を内心で驚く私に、彼女は「うちの親、どう思う？」「メチャクチャむかつく！」と怒りをぶちまけてきました。私が彼女の志望に関連する本を渡したから、「この先生は話を聞いてくれる」と思ったのかもしれませんが。彼女は自分の考えを否定した親をののしるとともに、育った家庭の状況によって人生が左右される社会の現状への不満を吐き出しました。

私はAさんの言葉にじっと耳を傾けました。しかし、「そうだよね」とAさんの怒りに安易に同意しても、Aさんの状況は何も変わりません。そこで私はこう言いました。「文句があるのなら、それを文章にしてみたら？ 文章にして訴えることは、むかつく世の中を変える手っ取り早い方法だよ」と。私の言葉にAさんは、「分かった」とうなずきました。そして私は、手元にあった未使用の手帳を彼女に渡しました。

毎 週月曜日、Aさんは社会に対する怒りや疑問をつづった手帳を持ってきました。使われる言葉は汚く、文章もつたないけれど、内容は面白いと思いました。彼女には書くことが合っていたのです。Aさんの言葉に私がコメントし、それにまた彼女が返す。手帳を介した対話が続く中で、Aさんは自分を客観視し始め、人の心のあり方に興味があることを自覚していきました。それまで全く読書をしなかった彼女に、ハイデッガーの入門書を貸したのは2年生進級目の頃でした。

Aさんとかかわりはその後も続きました。名古屋大学に進学し、3年生になった彼女は今、ドイツ哲学を学んでいます。

荒れていたAさんに、浅井先生はどのような支援をしたのか。Aさんはどのように変化し、名古屋大学合格にたどり着いたのか。Aさんが書いた手帳の内容を紹介したウェブオリジナル記事を、ぜひご覧ください。



<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article18315/>

巻頭

先生なら、どうしますか？

親や社会に対して憤り、教師にも反発する生徒に、「文句だけでは変わらない」と差し出した手帳
福井県・私立福井南高校 浅井佑記範

2

特集

学習意欲の向上

—— 学びの志向を捉えて教育活動をデザインする

20

発問・課題設定をキーに見る
主体的・対話的で深い学び 授業実践

英語・数学（教科横断型）

岡山県立岡山一宮高校 三尾健一／有岡桂佑

異なる見地から考察・推察する力を養う

お勤めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

26

探究学習 伴走する教師たち

石川県立七尾高校 中村晃規

停滞や衝突があっても、
研究に誠実に向き合う生徒が自分で考え抜けるよう、支援する

お勤めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

28

そうだったのか！学習評価

評定への総括の考え方と方法

お勤めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

30

生徒の可能性を引き出す 新進路選択支援

岡山県立邑久高校

地域の人たちと深くかかわる中で、自分の生き方や進路を考える

お勤めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

32

指導変革の軌跡

東京都・私立神田女学園中学校高校

探究学習の全校推進体制

研修や生徒の授業評価の共有を通じて、探究学習の意義が教師間に浸透

お勤めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

36

新課程レポート

進路・キャリア×探究セミナー レポート

探究・進路学習を生徒の「マイ・ストーリー」
の構築につなげるためのポイントとは

お勤めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

40

追跡！働き方改革

生き生きと働き続けられる学校づくりへの挑戦

熊本県立菊池高校編

第2回 働きがいを高める業務改善

趣旨の共有と段取りの可視化で目的意識を醸成

お勤めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

42

ともに生徒を育てる 地域と学校

岐阜県立羽島高校

生徒の発想を地域の支援で具現化。

絶滅危惧種の保全に力を合わせる

お勤めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

44

創り人からのメッセージ For Society, For School

一般社団法人北長瀬エリアマネジメント代表理事
石原達也

支援を受ける人とする人が、

顔を合わせない思いやりでつながる「公共冷蔵庫」

お勤めの分掌 管理職 教務担当 進路担当 担任

48

Reader's VIEW

46

若手教師・教育創造MTG

第2期 第2回オンラインミーティング ダイジェストレポート

<https://view-next.benesse.jp/>

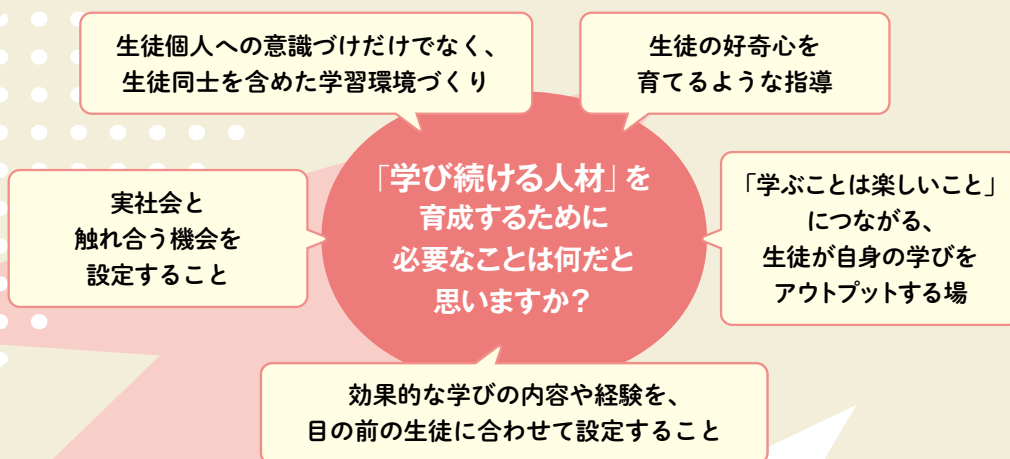
本誌記事は、ウェブサイトVIEWnext ONLINEでもご覧いただけます。

印刷製本／(株)協同プレス 編集協力／(有)ペンダコ 執筆協力／長谷川 敦 撮影協力／荒川 潤、岸 隆子、木村琢磨、田中秀和、ヤマグチイッキ イラスト協力／伊藤美樹、カモ
※本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます。
※本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。 ©Benesse Corporation 2024

の向上

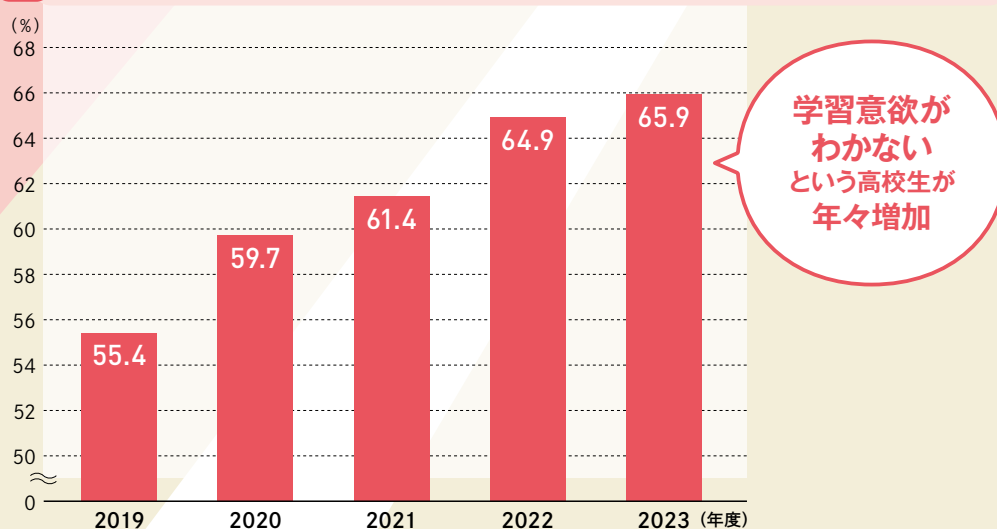
をデザインする

図1 教師が考える「学び続ける人材」を育成するために必要なこと



※『VIEW next』高校版読者モニターへのアンケート結果（アンケートは、2023年10月にウェブとファクスで実施）を基に編集部で作成。

図2 「勉強しようという気持ちがわからない」の肯定率（高校生）



注) 数値は、「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

※東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査 2023 年」を基に編集部で作成。

特集

学習意欲

——学びの志向を捉えて教育活動

今年度の本誌6月号の創刊400号記念特集において、これからの学校教育の課題の1つとして取り上げた「学び続ける人材の育成」は、国の「第4期教育振興基本計画」の中でも、今後の教育政策に関する基本的な方針の1つに掲げられています。そして第4期計画では、「初等中等教育や高等教育において、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解することや、興味・関心を喚起する学びを提供することなどにより、学びを習慣化し、生涯にわたって能動的に学び続けるための態度を涵養することが重要である」と述べられています。

実際、現場の先生方も、学び続ける人材を育成するために、生徒に学びを提供するにあたり、様々な工夫をされています（図1）。一方で、高校生の学びに向かう意欲は年々低下しています（図2）。その要因は様々なものが考えられますが、今号の特集は「学びの志向」の面から、どうすれば生徒の学習意欲を向上させることができるのか、考えてまいります。まずは、生徒を学びに向かわせる教育活動をデザインし、実践している3校の事例から見ていきます。

VIEWnext 編集部 統括責任者 柏木 崇

P.4 事例1 宮城県岩ヶ崎高校

地域と協働した探究学習で、広い視野と挑戦する姿勢を育む

P.8 事例2 茨城県立並木中等教育学校

学年を超えて切磋琢磨する環境で、能動的に学ぶ生徒を育てる

P.12 事例3 徳島県立小松島^{こまつしま}高校

こまめな生徒把握で学習イベントを修正。
生徒が自ら選ぶ学びで意欲を向上

P.16 事例を通して考える

6つの志向を踏まえて、学びの動機づけをいかに図るか

東京大学名誉教授、東京都・私立帝京大学中学校・高校 校長 市川伸一

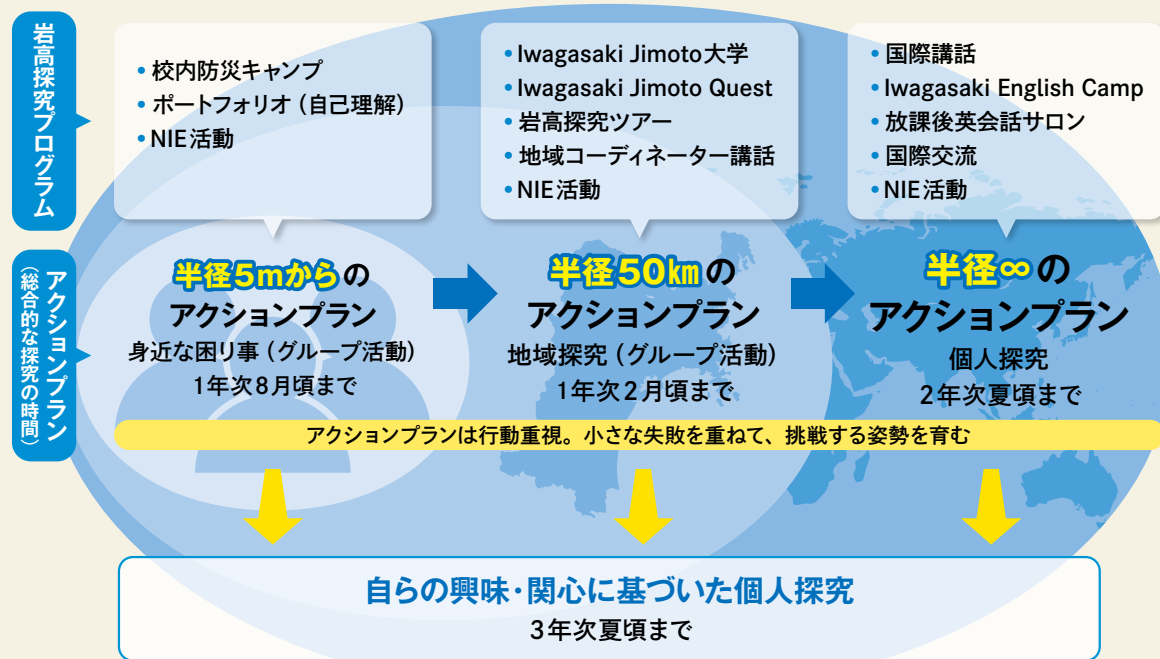
地域と協働した探究学習で、 広い視野と挑戦する姿勢を育む

希望進路は地元志向でも、地域や社会に対する関心が低い生徒が少なかった宮城県岩ヶ崎高校。そこで2023年度、生徒の目が地域や社会に向くよう、地域と協働した探究学習や課外活動を導入した。生徒の意欲を喚起するべく、身の回りの課題からスタートし、行動範囲を徐々に広げるカリキュラムとしている。

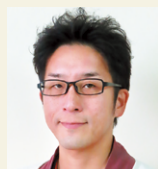
実践の全体像

生徒に自信を育む「岩高探究プロジェクト」

地域との協働を中心とした様々な「岩高探究プログラム」で視野を広げながら、「総合的な探究の時間」において半径5m、半径50km、半径∞の「アクションプラン」に挑戦し、それらの経験を進路選択につなげている。



※学校資料と学校への取材を基に編集部で作成。



三浦大樹
みづら・だいき
同校に赴任して1年目。地元商店街の地域おこし協力隊。



高橋翔平
たかはし・しゅうへい
進路指導部1学年探究担当
同校に赴任して5年目。1学年担任。国語科。



大沼宏多
おおぬま・こうた
進路指導部総合探究主任、2学年主任
同校に赴任して3年目。英語科。



千葉朋彦
ちば・ともひこ
進路指導部副部長
同校に赴任して4年目。3学年担任。英語科。



津渡香純
さいと・かすみ
進路指導部部長
同校に赴任して15年目。数学。

学校概要

設立 1951（昭和26）年
形態 全日制／普通科／共学
生徒数 1学年約30人
2022年度卒業生進路実績 国公立大は、室蘭工業大、岩手大、福島大、釧路公立大、名寄市立大、青森県立保健大、青森公立大、宮城大、秋田県立大、高崎経済大に16人が合格。私立大は、東北学院大、東北福祉大、北里大、専修大、日本大、文教大などに延べ79人が合格。

学習意欲の向上

— 学びの志向を捉えて教育活動をデザインする

取り組みの背景・全体像

地元志向でも、

地域への関心が低い生徒たち

宮城県岩崎高校は2023年度、宮城県「地域進学重点校改革推進事業」の指定を受けて、地域と協働した「岩高探究プロジェクト」をスタートさせた。進路指導部部長の齊渡香純先生は、その背景を次のように語る。

「本校の生徒は、希望進路は地元志向ですが、入学時は地域や社会への関心が低く、学校の近くに全国から移住者が集まる六日町通り商店街があることも知りません。そこで、生徒が地域や社会に関心を持てるよう、地域のよさを生かした活動を行うことにしました。地元志向の生徒が地域の状況を知ること、将来像を具体的に描けるようになるのではないかと期待もありました」

同プロジェクトは、「総合的な探究の時間」(以下、総合探究)で行う「アクションプラン」と、様々な正課・正課外活動を行う「岩高探究プログラム」の2本柱から成る(P.4図)。いずれも、自分の身の回りから地域、日本、そして世界へと、生徒が視野や行動の範囲を広げながら活動できるようにした。

「生徒は失敗を恐れる傾向があった

ため、取り組みやすい身の回りの課題から始めることで、挑戦する意欲や行動力を育もうと考えました(齊渡先生)

意欲を喚起する「アクションプラン」

視野も関心も挑戦も、
徐々に広げていく

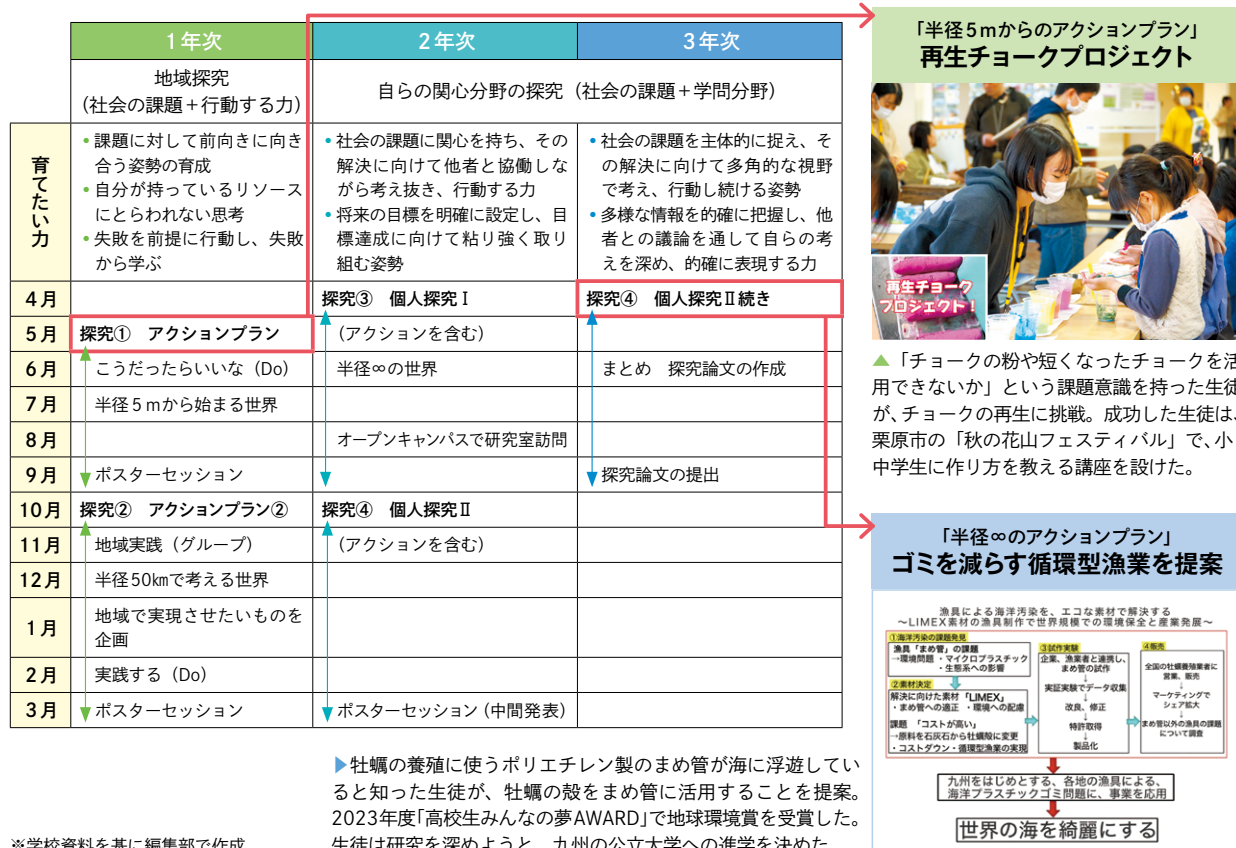
「アクションプラン」は、1年次1学期の「半径5mからのアクションプラン」から始まる(図1)。生徒は学校内や自分の関心から課題を見だし、個人かグループで探究する。23年度は、「校内の売店の誘致」「不要物の活用法」などの課題が設定された。1学年探究担当の高橋翔平先生は、こう語る。

「『アクション』を通じて、生徒に何かを立ち上げて行動する経験をしてほしいと思っています。チョークの再生に挑戦したチームに地域のイベントを紹介したところ、自分たちの経験を生かし、再生チョークのワークショップを設けました」

そのようにして生徒の意識を地域や社会に向けさせていき、1年次10月からは「半径50kmのアクションプラン」に、2年次からは「半径∞」として各自の関心に基づく個人探究に取り組む。

23年8月には、六日町通り商店街の地域おこし協力隊を務める三浦大樹さ

図1 「総合的な探究の時間」で行う「アクションプラン」の3年間の計画と、生徒のアクション(例)



んを「地域コーディネーター」として配置。週2日、進路指導室に在室し、生徒の探究学習の相談に乗っている。2年次の総合探究の授業に参加し、生徒の探究テーマの設定も支援した。

「地域おこし協力隊の活動をする中で、学校と地域の接点の少なさを感じていました。学校と地域の上に立ち、学校の希望を地域に、地域の資源や課題を生徒に伝えることで、生徒の学びを深めていきたいと思っています」（三浦さん）

意欲を喚起する「岩高探究プログラム」

見せたいのは

「挑戦する大人の姿」

「岩高探究プログラム」は、生徒の関心や視野を広げるための種まきとなるよう、地域と協働で多様な活動を行っている（図2）。例えば、「Iwagasaki Jimoto 大学」は年2回行う社会人講話で、地域で働く大人が個人・法人として挑戦していることを語る。

「大人たちは、与えられた仕事をただこなしているのではなく、それぞれ問題意識や目標を持ち、その解決や達成に向けて真剣に取り組んでいます。そうしたことを知ると同時に、実際に挑戦している大人の話を聞くこと

で、問題解決や目標達成のためにはどのような行動をすればよいのか、そのヒントを生徒がつかめることをねらいとしています」（齊渡先生）

23年度の「岩高探究ツアー」では、東日本大震災で被災した気仙沼市や、学校が位置する栗原市に隣接する岩手県平泉町の世界遺産を訪れた。気仙沼市のツアーは、地域の課題である防災や減災について学ぼうと、震災遺構や復興の取り組みなどを見学し、地元の中高生の語り部から話を聞いた。生徒からは、「自分と同じ高校生や年下の中学生が震災の経験を語り継いでいて、自分も見習いたいと思った」といった声上がるなど、同年代の交流は生徒に大きな刺激を与えている。

生徒が主体的に取り組めるよう、大半のプログラムは参加自由だ。ただ、できるだけ多くの生徒に参加してもらいたいと、声かけを工夫していると、進路指導部副部長の千葉朋彦先生は語る。「参加者を募る際には、『歴史好き募集』などと限定せず、街づくり・観光・環境・教育などのキーワードを多く挙げて生徒に声をかけます。自分に関係があると思わせるのがポイントです」

参加を尻込みする生徒もいるが、「大丈夫、行つてごらん」と教師がさりげなく背中を押す。「生徒の挑戦を応援

図2 地域と協働した「岩高探究プログラム」(例)

小児がん患者の支援



「小児がん患者の現状を知ってほしい」と、地元の夜市でレモネードを販売

▲美術部と有志の生徒が、小児がん患者を支援するための募金活動として、地元の夜市でレモネードを販売。参加者には、2年次の個人探究で「小児がんの治療薬の現状」「患者の栄養支援や看護」をテーマにした生徒もいる。

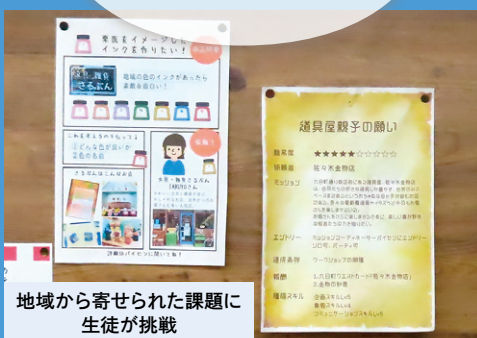
Iwagasaki English Camp



地元の日本語学校に通うネパール人留学生と英語で交流

▲郡部に位置する同校では、生徒が外国人と接する機会が少ない。そこで、英語漬けの日々を送る1泊2日のキャンプを実施。生徒26人、同校のALT、地元の日本語学校に通うネパール人留学生14人が参加。一緒に料理をしたり、ゲームをしたりしながら、英語で交流した。

事業指定後、地域との協働を強化。生徒が地域をリアルに感じる活動を拡大



地域から寄せられた課題に生徒が挑戦

Iwagasaki Jimoto Quest

▶地域コーディネーターの三浦さんが、地域から寄せられた課題を進路指導室前に掲示。有志の生徒が課題に取り組む。ある店は、店内の一角をどうしたら近隣住民に利用してもらえるかを相談。生徒がPR動画を作成し、SNSで配信したところ、ワークショップに利用したいと申し出があった。

※学校資料を基に編集部で作成。

学習意欲の向上

— 学びの志向を捉えて教育活動をデザインする

しつつ、寄り添い、支える距離感を心がけています」と清渡先生は語る。

意欲を喚起する「振り返りの仕組み」

ストーリー機能で目標設定と振り返りのサイクルを確立

生徒が自分の成長を実感する機会となるよう活用しているのが、「Classi」(*)のストーリー機能だ(図3)。生徒は、年度当初に自分の年間目標を設定。探究学習や課外活動、部活動などで自分が挑戦した内容や振り返りをストーリー機能に随時入力する。その上で、年4回の定期考査のタイミングで、蓄積した記録を振り返り、そこでの気づきを踏まえて目標を見直す(図4)。総合探究主任の大沼宏多先生は、ストーリー機能に活動を入力する生徒が年度当初より増えていると語る。

「その時に自分が何を思ったのか、どんな試行錯誤をしたのか、過去の自分と比較でき、自分の成長を実感できるからでしょう。自分の学びや経験を自分の言葉で記録したいという気持ちが生徒生えるのだと思います」

ストーリー機能は生徒が入力したくなる書式だと、清渡先生は指摘する。

「ストーリー機能はページをまたがずに一覧になっているので、ひと目で

内容を把握することができます。ボランティアや資格取得など、活動ごとに入力欄があるので、空欄を埋めたいという欲求に駆られます。そうした動機で活動したとしても、活動する中で得られるものがあり、『これができた。次はあれをしよう』という好循環が生まれています」

取り組みの成果・展望

地域に自ら出て活動する生徒たち

様々なプログラムを始めてから、意欲的に挑戦する生徒が増えている。地域の中学生に黒板アートの講習会を開催したり、小児がん患者を支援するボランティア活動を行ったりするなど、探究学習での取り組みを発展させた新たな活動に取り組む生徒も少なくない。

生徒にアンケートを取ったところ、「社会の課題に対する関心が高まった」の肯定率が100%だった(図5)。模擬試験の成績も上昇傾向にあり、自己肯定感の高まりが教科学習に波及している様子が見える。

「地域との協働はかなり進みました。今後はほかの地域や海外の高校生との交流を増やし、新たな刺激を与えていきたいと考えています」(清渡先生)

図4 記録の蓄積のサイクル

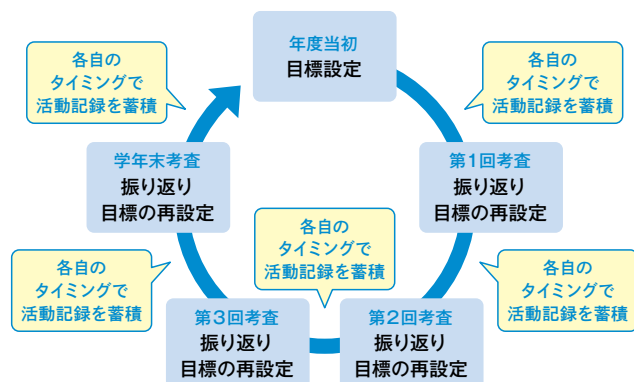


図3 「Classi」ストーリー機能の入力例

教科・科目の学習	「教科・科目の学習」「探究学習」「特技」「部活動」など、カテゴリを選択して入力
【英語】	英単語について、1年終了時までにターゲット1,400をマスターし、長文読解の際にわからない単語に遭遇する機会を減らす。
【国語】	古文の授業は苦手だが、その時代のことを想像しながら
見直し・復習は45,000文字以内で入力してください。	
やったこと・考えたこと	

文字数 5001

生徒は、活動前に目標を、活動後に取り組んだ内容や考えたことを入力。目標と照らし合わせて振り返る。教師はその入力内容を見て、コメントをしたり、声をかけたりする。また、その記録があることで、調査書や指導要録が格段に書きやすくなったと言う。

図5 生徒へのアンケート結果

Q. 探究活動や部活動、有志活動等の探究的な学びにおいて、地域での活動や地域の人々とかかわる場面はありましたか

はい 78.5%

いいえ 21.5%

Q. 探究的な学び(授業・探究学習・探究ツアー・NIE・国際交流・国際講話・部活動・有志活動等)を通じて、社会の課題に対する関心は高まりましたか

はい 100.0%

※図3～5は、学校資料を基に編集部で作成。

学習方法の指導は？

1年次は、学習方法とペースの定着を重視

同校には、中学校と高校の学習にギャップを感じる生徒が少なくない。そこで、入学当初の各教科の授業は、家庭学習を中心に、高校における学習方法を指導し、学習のペースをつかめるよう、支援している。また、生徒一人ひとりの悩みや課題に対応するため、毎日の学習記録を見て、「数学に偏っている」「こんなテキストがある」などと、担任が生徒一人ひとりの学力や適性に合ったコメントをしている。そして、個人面談では、生徒の意欲を喚起する声かけや学習方法のアドバイスなどを意識的に行っている。

* 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。

事例 2

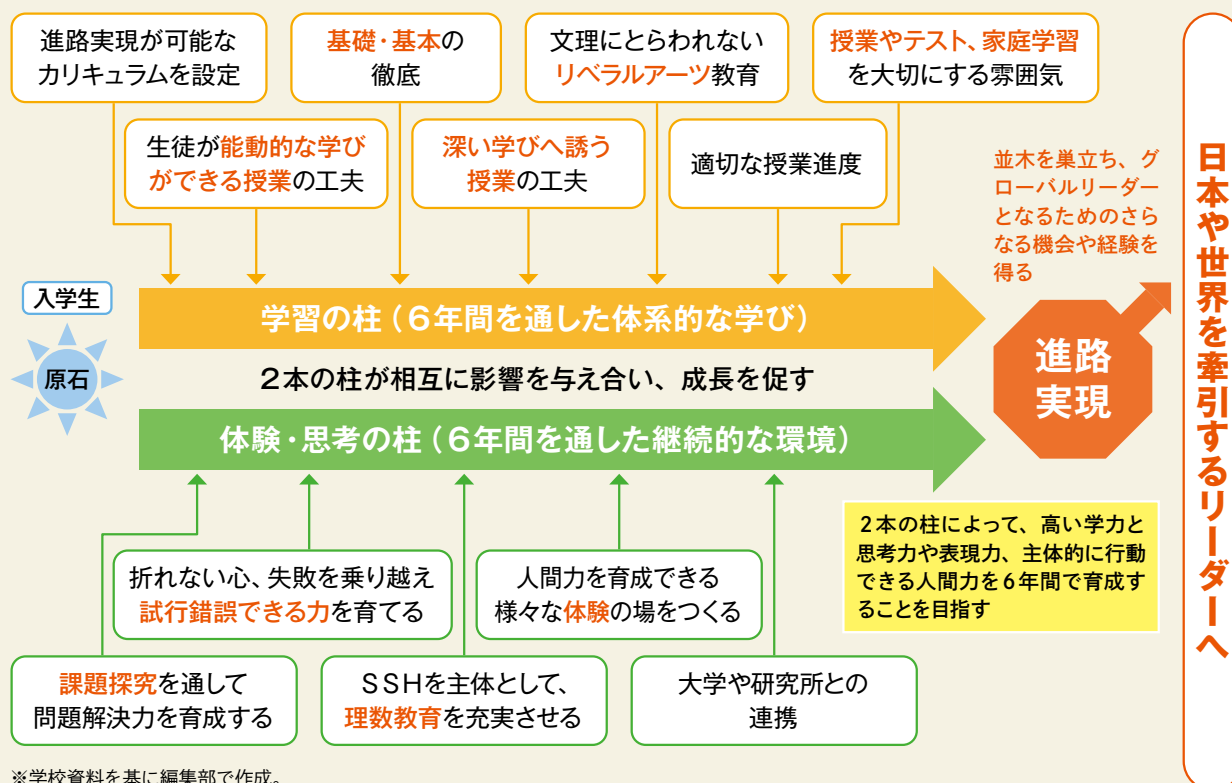
茨城県立並木中等教育学校

学年を超えて切磋琢磨する環境で、 能動的に学ぶ生徒を育てる

茨城県立並木中等教育学校は、「能動的な学びのできる人間力を備えたグローバルリーダー」を目指す生徒像に掲げ、プロセスを大切に探究学習に加え、異学年と合同の学習活動や地域の資源を活用した課外活動など、工夫を凝らした様々な活動で、生徒の意欲や主体性を育てている。

実践の全体像

目指す生徒像を実現するための6年間の学び



宮本 脩平
中学1学年担当
みやもと・しゅうへい
同校に赴任して4年目。英語科。



石本 由布子
教務副主任
いしもと・ゆうこ
同校に赴任して6年目。地理歴史・公民科(日本史・公共)。



吉村 大介
企画研究部部长
よしむら・だいすけ
同校に赴任して11年目。理科(化学)。



石井 透雄
学習進路部副部长
いしい・ゆきひろ
同校に赴任して12年目。地理歴史科(世界史)。



細井 ひろみ
学習進路部部长
ほそい・ひろみ
同校に赴任して11年目。国語科。

学校概要

設立 2008(平成20)年

形態 全日制/普通科/共学

生徒数 1学年約160人

2022年度卒業生進路実績 国立大は、北海道大、東北大、筑波大、千葉大、東京大、一橋大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大などに78人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大学、早稲田大などに延べ319人が合格。

学習意欲の向上

— 学びの志向を捉えて教育活動をデザインする —

取り組みの背景・全体像

「学習」と「体験・思考」を柱に
バランスよく教育活動を展開

SSH（※1）指定校の茨城県立並木中等教育学校は、例年、難関国立大学の合格者を多数輩出する進学校だ。「Top Learner」（高き学習者たれ）を校是とし、「能動的な学びのできる人間力を備えたグローバルリーダー」を目指す生徒像に掲げている。その実現に向けて、6年間を通じた体系的な学びを行う「学習の柱」と、問題解決力や試行錯誤できる力などを育む「体験・思考の柱」を教育活動の2本柱としている（P.8図）。学習進路部部長の細井ひろみ先生は、そのねらいをこう語る。

「教科学習と体験的な学びのどちらかに偏ることなく、バランスの取れた教育活動によって、教科学力や思考力、人間力などの資質・能力を育もうとしています」

「学習の柱」は毎日の授業のことを指す。全教科で探究的な学びを実践し、生徒が自分なりの問題意識を持ち、解決に向けて試行錯誤できるような授業を行っている。また学校独自の学習法も取り入れている。「TO学習」（※2）は、異学年合同の授業で、上級生が下級生に問題の解き方を教えたり、一緒に考

えたりする。「R80」（※3）は、ペアやグループで話し合ったことなどを80字以内でまとめる活動で、必ず2文で書き、接続詞で結ぶことがルールだ。いずれも生徒の主体的な学びを促し、論理力を育むことをねらいとしている。

「体験・思考の柱」の中心は6年間を通じた「課題探究」だ。1年次から生徒が自分でテーマを設定して探究に取り組み、探究を段階的に発展させるカリキュラムとした（図1）。失敗や成功を繰り返すことで、「まずはやってみよう」という主体性を育てている。

生徒が様々な体験を通じて人間力を高めていけるよう、学校行事や校外活動も充実させている（図2）。例えば、同校の3大行事の1つ「ウォークラリー」は、2日間で60kmを歩くというもので、苦しい時こそ踏ん張る精神力や、周りを思いやる心を涵養している。

意欲を喚起する「課題探究」

異学年合同のゼミで
助言し合い、試行錯誤を支える

同校の特徴的な学習活動は、4～6年次の「課題探究」だ。生徒は個人で探究に取り組みが、まず4年次の1年間をかけて探究テーマを設定する。企画研究部部長の吉村大介先生は、その

図1 「課題探究」6年間の流れ

学年	探究テーマ	活動内容
1年次	ミニ課題探究Ⅰ（個人）	個人で探究テーマを設定し、調べたことをまとめて考察し、学年発表会で口頭で発表。
2年次	ミニ課題探究Ⅱ（グループ）	企業のインターンシップを教室で体験する活動を通して、働くことの意義や企業活動への理解を深める。企業からのミッションの実現に向けて様々なアイデアを出し合い、プレゼンテーションを行う。
3年次	ミニ課題探究Ⅲ（グループ）	グループで探究テーマを設定し、身近な問題の解決に挑戦。成果を学年発表会で口頭で発表。
4年次	課題探究Ⅰ～Ⅲ（個人）	ゼミに所属し、1年間かけて個人探究のテーマを設定。その手順は、探究構想を立てた後、仮テーマを設定。構想発表会・中間発表会（スライドを使い、口頭で発表）を経て、最終決定。
5年次		口頭及びポスターで研究成果を発表。
6年次		研究論文を作成し、提出（A4で10ページ以上）。

「課題探究」は、1～3年次は「総合的な学習の時間」で、4～6年次は「総合的な探究の時間」と学校設定科目「課題探究」で実施。ゼミは、人文・社会科学・国際文化・スポーツ科学・芸術・生活科学・物理・化学・生物・地球科学・情報科学・数学・医学・自然科学・SDGsの15ゼミ。

※学校資料を基に編集部で作成。

図2 人間力や国際貢献のマインドを育む校外活動（例）

全学年	ウォークラリー	2日間で60kmを歩く。保護者も交通整理などで参加
1年次	学級づくり合宿（P.11図6）	学級づくりのための開校以来の行事
2年次	ブリティッシュヒルズでの語学研修	外国人講師による英語コミュニケーションの授業、ジャーナルの作成・発表
3年次	広島・京都平和研修	社会見学、文化理解、平和教育
4年次	ニュージーランド海外語学研修	2週間のホームステイでの英語によるコミュニケーション、異文化体験
5年次	アジア方面海外修学旅行	2023年度はベトナムを訪問。戦争遺構の見学等

「ウォークラリー」「かえで祭（文化祭）」「スポーツデー（体育祭）」が、同校の3大行事。2009年度にユネスコスクールに加盟後は、国際貢献・平和教育の視点を取り入れた学校行事を中学校段階から体系的に実施。各国の大使による講演なども随時行う。

※学校資料を基に編集部で作成。

※1 文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」。同校は2012年度から指定され、現在3期目。 ※2 「TO」は、Teaching Others の略。
※3 「R」は、リフレクション（振り返り）とリストラクチャー（再構築）のこと。「TO学習」「R80」のいずれも中島博司元校長が考案。

ねらいを次のように語る。

「自分が何に関心があり、何を深めたいのか、どんな困り事を解決したいのかといったことを、1年間かけてとことん掘り下げてほしいと考えています。自分に徹底的に向き合い、自分を理解する過程は、自分らしい学び方や目指したい進路を見極める上で重要であり、主体性も育まれます」

調べ学習で終わらないよう、どんなテーマでも生徒は実験や調査などを自分で行い、データを収集する。教師がそれらの方法を教えることはなく、生徒は研究構想の段階で、自分の探究に必要な実験や調査などを様々に試す。

そうした試行錯誤の過程において生徒の心の支えとなり、成長の糧にもなるのがゼミ活動だ。15のゼミから自分の関心に応じて1つを選び、4～6年生の各5人程が所属。週1回集まり、各目の探究の進捗を報告しつつ、テーマの設定や探究の進め方などを相談し合う(図3)。

「4年生は意欲的に探究している5・6年生の姿を見て、自分も先輩のように学びたいと憧れを抱きます。5・6年生は先輩にアドバイスをすることで、自分の考えが整理され、新たな気づきを得ます。異学年間の対話が、双方に刺激を与えています」(細井先生)

「課題探究」での成功体験が教科学習への意欲を喚起していると、教務副主任の石本由布子先生は語る。

「探究を通じて今までできなかったことができるようになった、難しい課題にも諦めずに努力できたといった経験は、生徒の自信になります。それが探究以外の活動にも積極的に取り組むことにつながっています」

意欲を喚起する「課外活動・コンテスト」
輝いている大人や他校生との対話が、生徒を刺激する

学校がつくば研究学園都市にある立地を生かし、数々の課外活動も実施している(図4)。企業や大学の研究室への訪問、研究者に最先端のトピックを聞く講座など、本物に出会い、輝いている大人と話すことが生徒を刺激していると、学習進路部副部長の石井透雄先生は語る。

「講演では、講師の話を50分間、質問タイムを50分間としています。講師の話に関心がある生徒が集まるため、質問タイムはもちろん、会の終了後も質問が続くことは珍しくありません」
コンテストなどへの参加(図5)も、生徒を刺激する場となっている。
「コンテストを通じて全国の優秀な

図4 本物に出会う課外活動(例)



やJAXAの研究室の見学、ブナ・ミズナラの植樹体験や棚倉断層の観察などを行った。



病棟で働く研修医の卒業生、自動車開発者、水族館飼育員、培養肉・ベジミートの研究者、折り紙で数理現象を研究するオリガミクスの研究者などが来校した。

「SSH講座」は、企業の施設や大学の研究室などを訪問する体験型講座。2023年度は、千葉県市原市のチバニアン地層(地球で最後に地磁気逆転が起こった痕跡が残る地層)の観察、半導体工場

「SSHサイエンスカフェ」は、各分野の研究者等を招いて行う座談会形式の講座。2023年度は、月2人のペースでゲストを招いて開催。ドイツの大学で飛行機の研究をしている卒業生や、小児科

図3 「課題探究」で行う、4～6年生が切磋琢磨するゼミ活動



ゼミには、4～6年生が各5人程、計15人程が所属している。探究テーマは一人ひとり異なるが、関心を持つ分野は同じだ。自分が取り組みたいことをゼミのメンバーに伝えてアドバイスをもらう。理系分野の研究はもちろん、文系分野でもオリジナルのデータを収集し、提案型の研究発表を目指す。各ゼミには担当教師がつき、運営を任されている。人文ゼミ(写真)では、5年生がゼミ長と副ゼミ長を務め、ゼミの司会進行を担っている。なお、ゼミは移籍できないが、探究テーマはいつでも変えることが可能だ。人文ゼミで物理をテーマにする生徒もいるという。「学びたいという思いが尊重されることで、生徒は意欲を持続させることができるのだと思います」と、吉村先生は語る。

※図3・4は、学校資料を基に編集部で作成。

学習意欲の向上

— 学びの志向を捉えて教育活動をデザインする

高校生と交流し、本物の研究者や起業家と接する経験は、生徒の財産になっています。コンテストに挑戦した先輩の姿を見て、自然と全国を目指す雰囲気、校内にありますし、対外的な場に参加する意義を伝え、生徒の背中を押すことも心がけています」（石本先生）

意欲を喚起する「導入期指導・面談」

成功体験を積みませ、積極的により点を褒める

1年次の導入期は、主体的に学ぶ意欲が高まるよう、学級づくり合宿を実施し、カッター研修（図6）などで成功体験を積みませるとともに、普段から褒めるようにしていると、中学1学年担当の宮本脩平先生は語る。

「1年次の1学期は、学習法として『答えを写すだけでは駄目だよ』などと指導する一方で、受け身の学習とならないよう、『ノートの書き方が分かりやすいね』などと、よい点を見取り、積極的に褒めています」

面談も生徒の自己肯定感を高めることを大事にしている。専門性や生徒との相性などを踏まえ、担任・副担任に限らず、その生徒にとって適任だと思われる教師が面談を担当。生徒が自分自身のことを信頼し、前向きになれる

ように接することを大切にしている。

「以前、クラスの中心的存在の生徒が面談中、泣き出したことがあります。私はその姿を黙って見守りました。すると生徒は十数分間で泣き止み、腹をくくって前を向き直しました。自分の弱さをさらけ出す場が必要だったのだでしょう。立ち直る力を信じて見守ることも、生徒が前を向くきっかけになるのだと感じました」（石本先生）

取り組みの成果・展望

切磋琢磨する生徒集団となるよう環境を整える

一連の取り組みの結果、東京大学志望者が数年間で1.5倍となった。中には自分の力を超える高い志望を持つ生徒もいるが、逆転合格者も出ている。「課題探究」の成果を生かして総合型選抜で進学する生徒も増えており、学校全体に生徒間で切磋琢磨する雰囲気が出てきている（図7）。

「学校は『生徒のいいところ探し』であるはず。できないことを指摘するのではなく、よいところ、できることを伸ばす。これからも生徒同士、教師同士で認め合い、集団として成長できる環境をつくっていききたいと思っています」（石本先生）

図7 いつでも学べる自習棟「ブライトホール」



自習棟「ブライトホール」には、4～6年生が平日・休日を問わず自習できる学習室があり、多い日は100人近い生徒が利用する。メリットは、生徒同士で切磋琢磨する雰囲気自然とできる点にある。「あの子がいるから自分も頑張ろう」という生徒もいれば、自習棟の明かりを見て、夜遅くまで頑張っているクラスメートの姿に刺激され、「自分もやってみようかな」と意欲が湧く生徒もいる。自習棟をよく利用する生徒は「ブライト組」と呼ばれ、各クラスに学ぶ雰囲気をつくる存在になっている。



ブライトホールには話し合いのスペース「T O ルーム」（*4）がある。自習中に疑問にぶつかった時、生徒が集まって意見を交わしながら解く場として活用されている。疑問の解答がホワイトボードに誇らしげに残されていることもよくあるという。

図5 各種コンテスト受賞実績（例）

- 「科学の甲子園ジュニア」全国大会に8回出場。2020年度は全国総合4位
- 「科学の甲子園」全国大会に5回出場。2017年度は全国総合4位
- 「科学オリンピック」2021年度日本生物学オリンピック金賞1人、銀賞1人、銅賞1人

図6 1年次の導入期の学級づくり合宿でのカッター研修



1年次5月に行われる学級づくり合宿では、カッター研修が行われる。大型ボートに生徒約25人が乗り、力を合わせてオールを漕ぎ、湾内を1周する。頑張ることの大切さを認識し、クラスの団結力を高めるとともに、成功体験を通して前向きに学校生活をスタートさせることを目的としている。午前中にオリエンテーリングを行い、4～5kmを歩いた後、午後にカッターを漕ぐといった体力的に厳しい活動にすることで、折れない心も育んでいる。

※図5～7は、学校資料を基に編集部で作成。

*4「TO」は、Teaching Others の略。

事例 3

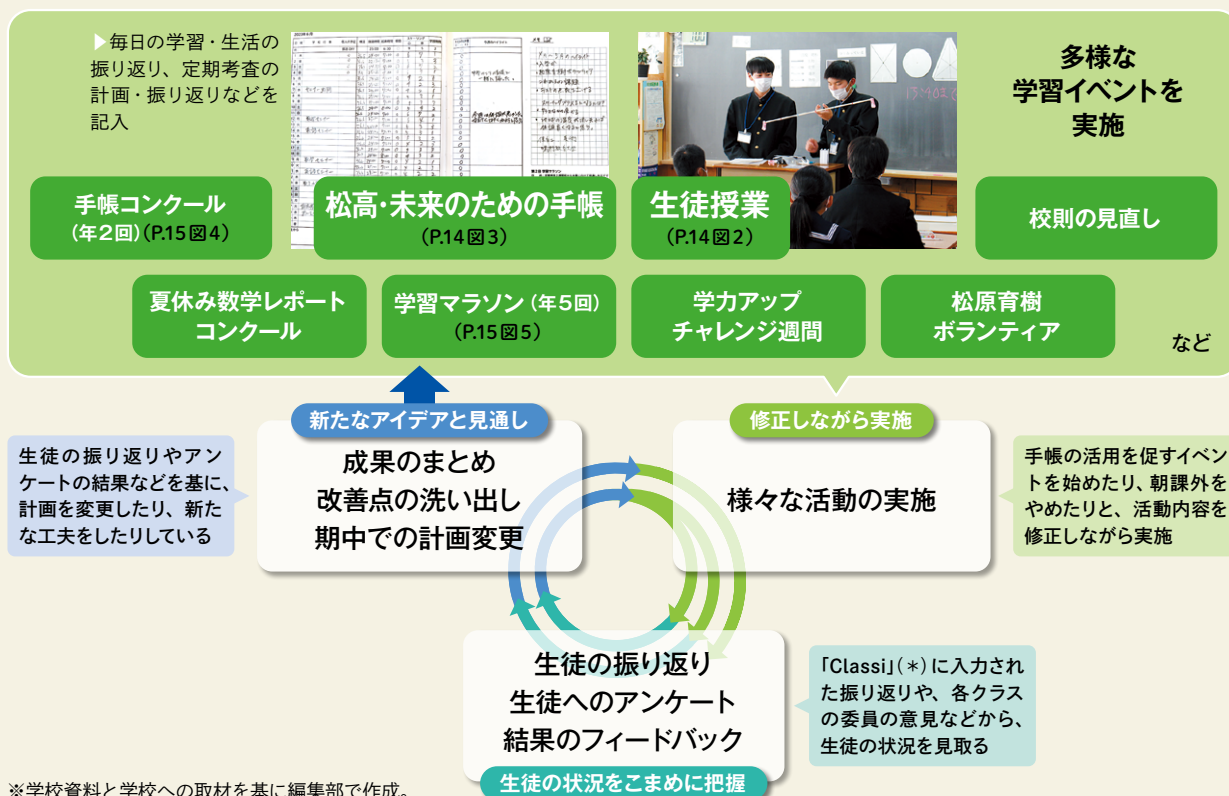
徳島県立小松島高校

こまめな生徒把握で学習イベントを修正。 生徒が自ら選ぶ学びで意欲を向上

徳島県立小松島高校には、中学校時代は学力中位層で、自己決定の経験があまりない生徒が多い。そこで生徒が自ら選んで学習できるよう、放課後課外や朝課外をやめ、多様な学習イベントを打ち出した。生徒をこまめに見取り、年度途中でも活動を修正して、生徒の実態に合ったものになるようにしている。

実践の全体像

自分の物語をつくる「松高 未来のためのまなびプロジェクト」



※学校資料と学校への取材を基に編集部で作成。



姫田史也
数学科主任
ひめだ・ふみや
同校に赴任して11年目。3学年担任。数学科、情報科。



久保早耶香
企画推進課チーフ、英語科主任
くぼ・さやか
同校に赴任して10年目。2学年担任。英語科。



伊藤奈津子
1学年主任、国語科主任
いとう・なつこ
同校に赴任して10年目。国語科。



笠江由美
同校に赴任して12年目。数学科、情報科。
かさえ・ゆみ



牧野浩章
教頭・教務担当
まきの・ひろあき
同校に赴任して2年目。地理歴史科(地理)。

学校概要

設立 1931(昭和6)年

形態 全日制/普通科/共学

生徒数 1学年約170人

2022年度卒業生進路実績 国公立大は、徳島大、鳴門教育大、香川大、都留文科大、高知工科大、北九州市立大などに10人が合格。私立大は、立命館大、関西大、近畿大などに延べ119人が合格。短大・専門学校進学39人。就職16人。

* 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。

学習意欲の向上

— 学びの志向を捉えて教育活動をデザインする —

取り組みの背景・全体像

若手教師の課題感から、カリマネと併せて改革を推進

徳島県立小松島高校は2018年度、生徒の自走を支えることを目指して、「松高 未来のためのまなびプロジェクト」（以下、プロジェクト）をスタートさせた（P.12図）。そのきっかけは17年度に行った、台湾の高校生の訪日交流事業だ。若手教師が中心となつて交流活動を立案する過程で、生徒の実態を整理したところ、自校の課題が浮き彫りになり、教師間で改革の機運が高まった。交流事業の立案に携わった1学年主任の伊藤奈津子先生は、当時を次のように振り返る。

「本校の生徒の多くが、中学校時代は学力中位層であり、生活面でも学習面でも注目や注意をあまり受けてきませんでした。そうした生徒も本校では、自分たちが中心となつて学習も学校行事なども進めていきます。そこで、生徒が自分で判断して物事を進める活動をプロジェクトとして行い、生徒の自己肯定感を高めていこうと考えました。新学習指導要領の実施を控えていたこともあり、カリキュラム・マネジメントと併せて、プロジェクトを進めていきました」

当時の校長の後押しもあり、若手教師中心のプロジェクトチームを編成。まず、生徒の学力推移や問題行動が起きやすい時期など、課題を改めて整理し、校内で共有した上で、育成を目指す資質・能力を職員会議で議論した。そして、「自分の物語をつくる」をキーワードに、人間的成長を上位目標とした「身につけたい力」（図1①～③）を設定し、21年度にはルーブリックを作成した。

同時に、カリキュラム・マネジメントの視点で教育活動を見直した。19年度に課題テストの実施を年5回から3回に変更し、放課後課外を廃止。一方で、学習時間などを毎日記入する生活記録を月1回提出させ、家庭学習習慣の定着を図った。さらに、自ら選んで視聴した学習動画のレポートを書く「学力アップチャレンジ週間」など、任意参加の学習イベントを実施して、生徒に参加を呼びかけた。指導教諭の笠江由美先生は、次のように説明する。

「放課後課外は生徒の成績次第で復活させる条件で廃止しましたが、成績は低下せず、22年度には朝課外もやめました。ただその後、生徒の学習意欲の高まりを受けて、希望者を対象に放課後課外を再開しました。どの活動も、参加するかどうかを選べるからこそ、参加した生徒は意欲的に学びます」

図1 「身につけたい力」と「松高ルーブリック」

校訓

自主自律
親和協同
日新日進

身につけたい力

① 自分とむきあう

- ・自分のことを知る
- ・自分の目標を持つ
- ・自分がやる、自分でやる
- ・自分をコントロールする
- ・昨日の自分より前進する

② 人とむきあう

- ・相手と真剣に話す
- ・相手の立場で考える
- ・相手のことを認める
- ・自分の考えを伝える
- ・協力して目標を達成する

③ 世界とむきあう

- ・世界のことを知る
- ・地域のことを知る
- ・情報を適切に活用できる
- ・世界・地域の課題を見つける
- ・社会貢献への意欲がある

松高ルーブリック

資質・能力	レベル1	レベル2	レベル3 3年次修了時の到達目標	レベル4	F
① 自分とむきあう	・自分について情報を収集し、自分の長所を知っている。①-1 ・自分は集団の一員だと感じることができる。①-2	①-1、2 ・見通しを立てることができる。①-3 ・自分をコントロールし、学びに、むかい、試行錯誤を重ねることができる。①-4	①-1～4 ・自分の不完全さを受け入れることができる。①-5 ・試行錯誤や振り返りを通して粘り強く問題の解決にむかうことができる。①-6	①-1～6 ・試行錯誤や振り返りを通して粘り強く問題の解決ができていく。①-7	いずれも満たさない
② 人とむきあう	・相手に関心を持ち、相手の立場に立つことができる。②-1 ・共感的態度をもって話をすることができる。②-2	②-1、2 ・相手に理解してもらえるように、言葉や非言語能力を使って自分の考えを述べたり、コミュニケーションを取ったりできる。②-3	②-1～3 ・他者を信頼することができる。②-4 ・仲間と協力して目標を達成しようとする。②-5	②-1～5 ・仲間と協力して目標を達成できる。②-6	いずれも満たさない
③ 世界とむきあう	・自分が住む地域や世界について情報を収集している。③-1	③-1 ・世界や地域の課題を発見している。③-2 ・解決にむけた取り組みに考えをめぐらせることができる。③-3	③-1～3 ・情報を適切に活用することができる。③-4 ・自分を生かして社会や他者の役に立ちたいと考えて行動している。③-5	③-1～5 ・自分を生かして社会や他者の役に立ちたいと考え、行動し、周囲に働きかけを行っている。③-6	いずれも満たさない

3つの「身につけたい力」の「松高ルーブリック」を基に各教科・科目のルーブリックを作成し、生徒も教師も「身につけたい力」を授業で意識できる仕組みとした。※学校資料を基に編集部で作成。

意欲を喚起する「生徒授業」

「他者に教える」という目的が
主体的な学びを促す

プロジェクトの柱は、生徒が教師役となつて授業を行う「生徒授業（図2）だ。『深く考えることの大切さ』などを生徒が実感することを目的に、笠江先生が17年度に担当した数学の授業で始めた。同級生に加えて、学校説明会での中学生への模擬授業で行ったところ、参加者に好評だった。そこでプロジェクトを機に、「生徒授業」を2年次の「総合的な探究の時間」における探究学習の1テーマとし、中学校への出前授業も開始。校内研修で教師に「生徒授業」の実施ポイントを共有し、各教科が状況に応じて行うようにした。

「他者に教えるためには自分が深く理解する必要がある、自分で何が必要かを考えて学ぶようになります。自らの工夫で他者が理解してくれば、自己肯定感につながります。様々な効果が期待できる活動です」（笠江先生）

意欲を喚起する「松高未来のための手帳」
毎日の記入が自己管理能力を
高め、自走につながる

20年度には、生活記録を基に、学習

や学校行事などを記録する「松高・未来のための手帳（以下、手帳）」（図3）を導入した。

「毎日の学習や行事予定などを手帳に書くことは、『来週はこの行事があるから、課題は今週中に取り組んでおこう』などと考える機会になります。書き続けることでメタ認知や自己管理が少しずつできるようになり、振り返りも理由を添えてよかった点や課題を書くようになっていきます。手帳の活用法を共有しようと、『手帳コンクール』（図4）を始めました」（笠江先生）

「手帳」の活用を促す仕かけとして、「学習マラソン」（図5）も始めた。「手帳」に記入した学習時間を1週間分集計し、クラス・個人の上位者を表彰するイベントで、一人ひとりの努力を評価する機会にもなっている。今は学習時間を「Classi」に入力させている。生徒の学習意欲がより高まりやすくなったと、数学科主任の姫田史也先生は語る。

「『Classi』で総学習時間がグラフで示されるので、生徒は自分の学習状況を把握しやすくなりました。『前回数学に時間をかけ過ぎたから、今回は英語に力を入れよう』などと計画を立てられます。『たとえ0時間でも、それを自覚するために毎日入力しよう』と、生徒に呼びかけています」

図3 メタ認知や自己管理を促す「松高・未来のための手帳」

2023年度第1回手帳コンクール 最優秀賞の手帳

就寝・起床時刻、学習時間など

学校行事や自分の予定

「今週のハイライト」を週末に記入し、1週間を振り返る

メモ欄に宿題の範囲を書き込む生徒も

自分の状況をつかめるように体調や気分を10段階で記入

- A5版、64ページ ● 学年ごとに1冊ずつ用意
- 各ページの項目は教師が話し合つて作成した学校オリジナル
- 毎日の生活の記録、定期考査に向けた学習計画と振り返り、委員会や生徒授業の記録、学校行事の振り返りなどを記入。進路を考える材料にする
- 生徒に手帳を定期的に提出させ、クラス担任が生徒の記入に視線を引いたり、コメントを書いたりして返却。生徒が適切にメタ認知し、自己管理ができるようになることを支援している
- 手帳に書かれた生徒の様々な活動記録を、教師は調査書や指導要録を記入する際に活用

※図2・3は、学校資料と学校への取材を基に編集部で作成。

図2 生徒の学習意欲を育む「生徒授業」

概要

- 生徒が教師役となり、校内で授業を行う
- 実施する授業の内容は基本的に、担当学年・教科の教師が提示したテーマを基に生徒が考える
- 学校説明会で中学生に対して行う模擬授業や、中学校への出前授業としても実施

ねらい・効果

- 学びを蓄えていく視点
- 小・中・高の学びのつながり
- 探究する楽しさ
- 他教科とのつながり
- 分りやすく伝える
- 自分の成長
- 伝えたい思いが伝わった達成感
- 主体的に学ぶ楽しさ
- 本当の分かるを体感

教師役を担当した生徒の声

- 重要な箇所はチョークの色を変えて黒板に書いた。授業を受けた人が「分りやすかった」と言ってくれてうれしかった。次も頑張りたい
- 数学の授業で、具体的に数をあてはめて説明したところ、先生に「いい説明だね」と褒めてもらった。式が長かったので、短く説明できたのがよかったのだと思う

学習意欲の向上

— 学びの志向を捉えて教育活動をデザインする

意欲を喚起する「生徒の声の活用」

生徒の声をキャッチし、
年度内でも活動を修正

活動は、生徒や活動の状況を見取り、年度途中で修正したり、新たに始めたりと、より効果的なものになるようにしている。その判断材料の1つが、生徒の振り返りだ。主要な活動では、生徒が「Classi」に入力した振り返りの中で他の教師や生徒に共有したい内容を、教師がコピー&ペーストしてまとめ、「Classi」に共有している。

生徒の声を直接聞き、活動に反映することも大切に行っている(図6)。例えば、「学習マラソン」に対する改善点を各クラスの委員長に聞いたところ、「1週間前はみんな勉強するから、2週間前の方がよい」という意見が出たため、実施期間を定期考査2週間前からの1週間に変更した。

また、生徒や保護者にICTでアンケートを取り、その結果を活動に生かすこともある(図7)。企画推進チームの久保早耶先生は、次のように語る。

「『Classi』のアンケート機能の活用によって、生徒の声をタイムリーに把握することができるようになりました。自分たちの声が反映されることを

経験した生徒は、学校生活に対して積極的になっていきます。学校への満足度は、年度末には入学時と比べてかなり上がります」

取り組みの成果・展望

保護者の約8割が子どもの
学習意欲の向上を実感

プロジェクトを始めてから、生徒は長期休業明けも落ち着いて学習に取り組むようになった。卒業時には、生徒から「3年間、学習を頑張った」「課外活動など、たくさんチャレンジができた」といった声が聞かれ、保護者へのアンケートでは約8割が「入学後、子どもの学習意欲が高くなった」と回答した。また、「松高ルブリック」の自己評価を行ったところ、生徒の1年次1月の自己評価が教師の評価と一致し、生徒のメタ認知能力が上がったことを実感したという。牧野浩章教頭は、今後の展望を次のように語る。

「参加する活動を生徒が自分で選ぶというスタイルが、生徒の主体性を尊重することにつながり、結果的に学習意欲や自走力を高めていると感じています。学校全体が落ち着き、学習に向かう環境が整ってきた中、学力向上はあつと実現されると考えています」

図6 生徒の声を反映して修正した活動(例)

- 「手帳」のメモ欄を、罫線ではなく、マス目に変更
- 校則の見直しについて、各クラスがホームルームで話し合い、生徒総会と職員会議を経て決定。靴下の規定やアルバイトの条件が緩和された
- 中学校での「生徒授業」で、教師が設定したテーマの中から選ぶ形から、生徒が自分でテーマを考える形に変更。加えて、訪問先の中学校を教師が割り振るのではなく、各生徒の母校に変更

図7 生徒にICTで取ったアンケート(例)

- 「松高ルブリック」(P.13図1)について、生徒の自己評価のアンケートを1年次4月と12月に実施
- 卒業式の退場曲は、3年生にアンケートを取って決定
- 生徒と保護者に学校評価のアンケートを年度末に実施

職業調べ (P K・現代の国 語)	その他	R5 1年生	158/1 68	145/16 8	2023/11/20 10:25	集計
イチローが 伝えたこと は?	その他	R5 1年・2年・3 年	285/5 02	93/502	2023/11/16 14:20	集計
保健アンケ ート(心身 の健康)		R5 1年・2年・3 年	416/50	397/50		

アンケートは「Classi」で配信。回答率が低い場合は、教師が口頭でも生徒に回答を促す。

※図4～7は、学校資料と学校への取材を基に編集部で作成。

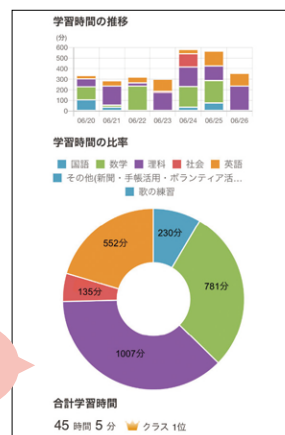
図4 「松高・未来のための手帳」の活用法を共有する「手帳コンクール」

自分の「手帳」の活用法を、該当のページの画像と200字程度の説明文とともに「Classi」のポートフォリオから応募。校長と教頭、学年主任が、ほかの生徒に参考にしてほしいと思った活用法を最優秀賞、優秀賞、審査員特別賞として選出。年2回実施。



図5 学習時間を見える化する「学習マラソン」

定期考査の2週間前からの1週間、生徒が教科別の学習時間を「Classi」に入力。総学習時間の上位3クラスと個人上位3人を学年別に表彰する。参加は任意で、年5回実施。1週間の学習時間を教科別にグラフにして、全校に発表する。生徒からは、「計画を立てて勉強することができた」「モチベーションが上がり、学習時間をいつもより増やすことができた」といった声が上がっている。

約8割の
生徒が参加

6つの志向を踏まえて、 学びの動機づけをいかに図るか

事例の3校が様々な工夫している取り組みは、どのように学習意欲を喚起しているのか。
東京大学の市川伸一名誉教授に、自身が提唱する「学習動機の2要因モデル」を基に、
各校の活動と学習意欲のつながりを分析してもらった。さらに、学習意欲を高める方策として、
「習得」と「探究」のサイクルを取り入れた授業づくりについて聞いた。

東京大学名誉教授、東京都・私立帝京大学中学校・高校 校長

市川伸一

学習動機のタイプ分け

大学生調査から、学習動機を 6つの志向に構造化

私が学習動機に着目したきっかけは、
東京工業大学に勤めていた1989年
に、地域の小・中学生や高校生を対象
に行った学習相談室でした。子どもか
ら学習の悩みを聞くうちに、子どもが
自律的に学ぶようになるためには、分
からないところをその都度教えるだけ
でなく、その子がどのように学習して

いるのかに焦点をあてて学習改善を図
るべきだと考えるようになりました。
さらに、学習方略は「自分は何のため
に学ぶのか」といった学習動機と関係
しているのではないかと考え、学習動
機や学習意欲の向上の要因についての
調査を、大学1年生を対象として自由
記述方式で実施しました。その結果を
分類し、構造化したものが「学習動機
の2要因モデル」です(図1)。

図1の中の①③は、学習内容その
ものを重視する学習動機で、「内容関
与動機」と呼んでいます。
①**充実志向** 学習の内容自体が面白く、
やりがいを感じる。
②**訓練志向** 学習は頭を鍛えるために
行うもので、何に役立つかは分か
らないが、大人になってから発揮され
ると考えている。

③**実用志向** エンジニアになりたい、
海外で仕事をしたいなど、学習が将
来の仕事に役立つという動機。
図1の中の④⑤⑥は、学習内容と関
係が浅い学習動機であり、「内容分離
動機」と呼んでいます。
④**関係志向** 友人と一緒にだと楽しい、
先生が好きだから頑張れるなど、そ
の人がいるから学びに参加する。
⑤**自尊志向** 競争に勝つ、他者より成

いしかわ・しんいち 文学博士。専門は教育心理学。認知心理学を基盤にした個別学習支援や授業づくりなどの実践研究に取り組む。長年、中央教育審議会教育課程部会の委員を務め、学習指導要領改訂に携わってきた。帝京大学先端総合研究機構次世代教育研究部門特任教授などを兼任。著書に、『これからの学力と学習支援 心理学から見た学び』(左右社)、『授業からの学校改革』(図書文化社)、『勉強法が変わる本 心理学からのアドバイス』(岩波ジュニア新書)など多数。



学習意欲の向上

— 学びの志向を捉えて教育活動をデザインする

績がよいなど、競争心やプライドから成る動機。

⑥報酬志向 成績が上がったらお小遣いをもらえるなど、報酬が目あての動機。「先生から褒められたい」といった社会的報酬も含まれる。

6つの志向の関連

報酬が目あてでも

学びの入り口としては有効

「内容関与動機」が高い子どもは、結果として「内容分離動機」の子どもに比べてよい成績を上げる傾向があります。学習内容を身につけようと自分で学習方略を工夫するので、学習の質が高くなるからです。

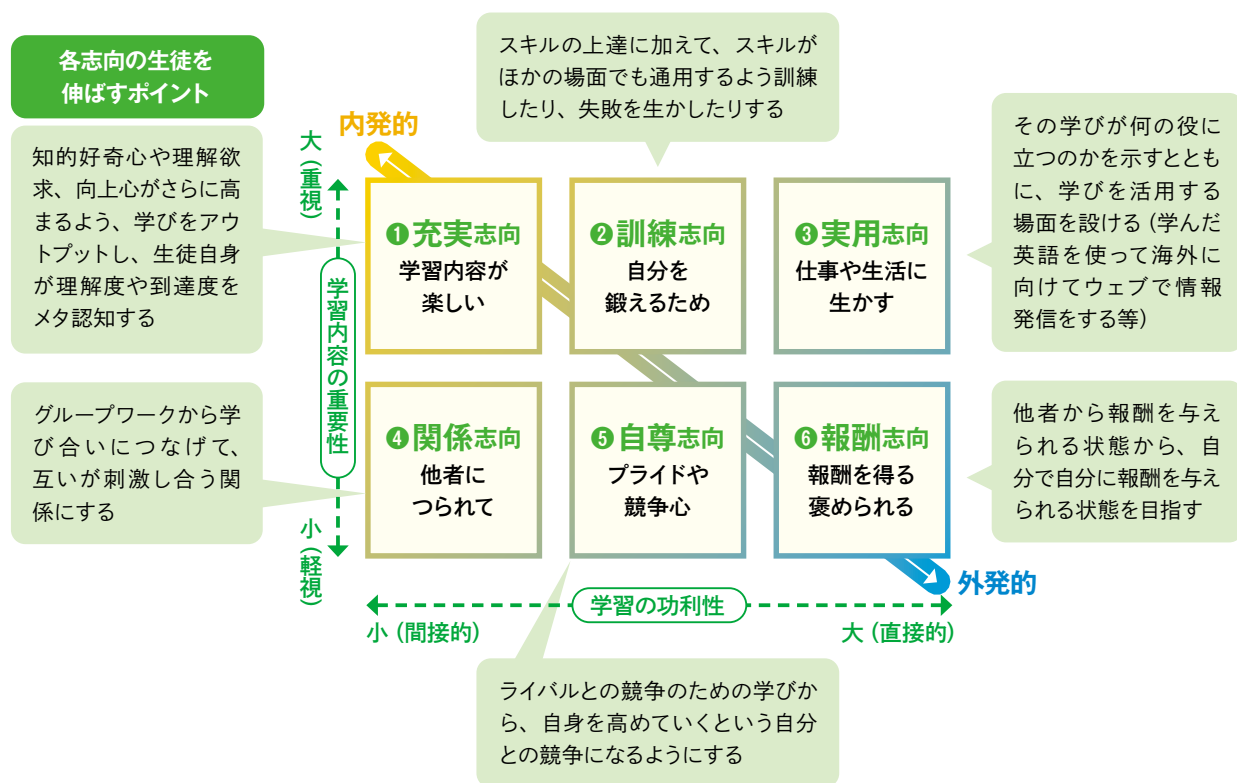
先生方は、生徒が「内容関与動機」で学べるように指導していると思います。その教科・科目が好きだから一生懸命勉強して教師になり、生徒も同じように**①充実志向**で学んでほしいと考え、教科・科目の魅力を伝える工夫をしていることと思われます。あるいは、「社会で生きる力を身につけさせる」といった観点で、**②訓練志向**や**③実用志向**を重視する先生も多いでしょう。

しかし、生徒がすべての教科・科目の学習内容に学ぶ意味を見いだすことは難しく、「テストに出るから覚えて

おくこと」などと、**⑥報酬志向**で学習意欲を上げようとすることもあるかもしれません。「内容分離動機」は、先生方にはあまり好まれないかもしれませんが、せんが、学習が苦手な子どもが学びに向かう入り口としては有効だと考えています。

例えば、友人と一緒にだとやる気が出るといった**④関係志向**や、少々幼いことかもしれないが、シールをたくさん貼ってもらうために頑張る**⑥報酬志向**でも、学習動機として有効なケースがあります。そして、それらが最初の学習動機であっても、学習の過程で成功体験を積み重ねることによって学習内容の面白さや実用性を認識し、「内容関与動機」に移行することがあります。「内容分離動機」を学習の入り口として、そこにとどまることなく、「内容関与動機」につなげる仕かけが大切です。学習動機は生徒それぞれに異なります。同じ志向を持っていても生徒によって強弱があるでしょうし、1人の生徒の中に複数の志向があるはずで、そこで、6つの志向をそれぞれ刺激する活動を行うとともに、生徒の志向性に応じた活動に重点を置いたカリキュラムにするとよいでしょう。図1には6つの志向の生徒を伸ばすポイントを例示したので、参考してみてください。

図1 「学習動機の2要因モデル」 学習意欲に影響する6つの志向と、各志向の生徒を伸ばすポイント



※市川名誉教授の提供資料と取材を基に編集部で作成。

3校の実践に見る動機づけのヒント

6つの志向を刺激しつつ、生徒の気質に応じて重点化

事例1～3の各校の実践が、6つの志向のどれにつながっているのかを見ていきます(図2)。

事例1の宮城県岩ヶ崎高校は、地元商店街との連携や地域コーディネーターの支援によって**④関係志向**を生み出し、探究学習の楽しさややりがいを感じ、**①充実志向**も高めています。地域の依頼に応じた課題に取り組むことは、**③実用志向**につながります。

ICTツールの書式を利用した活動記録は、「空欄を埋めたい」という欲求を引き出している点で**⑥報酬志向**と言えます。空欄を埋めるための学習の過程では、学びの面白さを知り、**①充実志向**への転換が期待できます。**⑥報酬志向**を入り口に「内容関与動機」へと発展させる戦略的な取り組みだと思えます。

事例2の茨城県立並木中等教育学校が行う「課題探究」は、自分が心底追究したいテーマを考える過程で学習そのものの面白さを感じさせる**①充実志向**の取り組みです。そして、「課題探究」の成果を生かしたコンテストなどへの参加は、自分の力を試すのであれば**⑤自尊志向**であり、結果はどつであれ、

挑戦する過程が楽しいのであれば**①充実志向**になります。また、企業訪問や研究者の講演など、本物に触れる経験は**③実用志向**を喚起させます。

教科学習や探究学習における異学年合同の活動は、**④関係志向**をうまく引き出しています。教わる側の下級生はもちろん、教える側の上級生にとっても学びの理解が深まるので、双方にとって**①充実志向**につながります。

それらと同様の効果を上げているのが、事例3の徳島県立小松島高校の「生徒授業」です。**④関係志向**から始めた学びが、**①充実志向**になっていく様子が見られました。他者が理解できるように伝える学びは、社会で必要な力身につける**③実用志向**の面もあります。

「学習マラソン」は、クラスで協力したいという思いを引き出す**④関係志向**の活動で、実際に貢献できたことに誇りを感じる**⑤自尊志向**につながっています。加えて、「松高・未来のための手帳」で自分の成長や課題をメタ認知する機会が日々あることが、**①充実志向**に結びついていました。

3校とも、6つの志向それぞれを刺激しつつ、生徒の志向の特徴に応じた活動に重点を置いたカリキュラムとし、より多くの生徒に学習の動機づけを図っていました。

図2 3校の実践と6つの志向の関係(各校の記事で取り上げた活動を分類)

	事例1 宮城県岩ヶ崎高校 (P.4-7)	事例2 茨城県立並木中等教育学校 (P.8-11)	事例3 徳島県立小松島高校 (P.12-15)
① 充実志向	- アクションプラン(知らなかったことを知る、自分で学びを深める) - 岩高探究ツアー(地域を深く知ることが楽しい)	- 課題探究(1年間かけて探究テーマを設定) - 異学年合同のゼミ活動、TO学習(他者に教えるために自分が深く理解する)	- 生徒授業(他者に教えるために自分が深く理解する) - 松高・未来のための手帳(自分の努力をメタ認知し、達成感を得る)
② 訓練志向	ICTを活用した活動記録(蓄積した記録を振り返り、成長を実感する)	課題探究(研究に必要なデータを自分で収集する)	松高ルーブリック(次に目指す状態を明確に持てる)
③ 実用志向	Iwagasaki Jimoto大学、アクションプラン(地域の課題や状況を知る)	SSH講座、SSHサイエンスカフェ(本物の研究や実社会に触れる)	生徒授業(他者が理解できる説明をする)
④ 関係志向	- アクションプラン(地域課題に取り組む) - 岩高探究ツアー(気仙沼市で同市の中高生の語り部の話を聞く) - 地域コーディネーターの配置(地域の役に立ちたい)	- 異学年合同のゼミ活動、TO学習(後輩に教えられるように頑張る、優れた研究・指導を行う上級生に憧れる) - Cutter研修(仲間と一緒に頑張ることができた) - ブライトホール(仲間が頑張っているから自分も頑張る)	- 生徒授業(友人に教えられるよう、頑張る) - 学習マラソン(クラスで協力したい、仲間が頑張っているから自分も頑張る)
⑤ 自尊志向		コンテストなどへの参加(競い合って自分の力を試したい)	学習マラソン(クラスに貢献できたことに誇りを感じる)
⑥ 報酬志向	ICTを活用した活動記録(自分の活動を一覧化すると、未記入の項目が気になり、埋めたくなる)		手帳コンクール(教師に認められる)

注) 各校の活動は、複数の志向にまたがっているケースがある。 ※市川名誉教授の取材を基に編集部で作成。

学習意欲の向上

— 学びの志向を捉えて教育活動をデザインする

学習意欲を高めるための視点

「習得」と「探究」の往還で、
学習意欲を刺激する

3校の事例では探究学習の実践が多く取り上げられており、探究学習の意義が高校現場に浸透してきたことを実感しました。だからこそ生徒の学習意欲を高める上で着目してほしいのが、「習得」と「探究」のバランスです。基礎・基本の知識を身につける「習得」と、自分で設定したテーマを追究する「探究」は、どちらも等しく重要な学びであり、学習指導要領では「習得・活用・探究」の学習プロセスが示されています。

「習得」と「探究」は別々に存在する学びではありません。「習得」で身につけた知識・技能を生かして「探究」するとともに、「探究」を通じて自分の足りない知識・技能を自覚することが、「習得」の動機づけになるといった関係があります(図3)。例えば、探究の成果を海外の高校生に発信する活動を行い、相手にうまく伝えられなければ、英単語や文法などの必要性を痛感し、英語の授業に一生懸命取り組むようになります。その結果、海外の高校生とスムーズにやり取りができるようになるれば、授業への意欲がさらに高まります。ところが、生徒は自分で学びを深め

る「探究」には意欲的でも、知識・技能の「習得」への意欲が乏しいといった課題をしばしば耳にします。そこで、「習得」においても楽しく学び、成長を実感できる「教えて考えさせる授業」を紹介します。

授業の流れは、1教師の説明、2理解確認、3理解深化、4自己評価となります(図3)。そこで重要なのは、2理解確認です。人は一度説明を聞いたからといって、その内容をきちんと理解するとは限りません。1教師の説明後、理解した内容を隣同士で伝え合うなど、生徒がアウトプットし、学習内容の2理解確認をする場を設けてみてください。そうして基本的な知識を共有してから、3理解深化で高い問題解決を行うのです。インプットしたことを自分の言葉で説明する、考えを出し合って協働で問題を解決する、自分の理解度を4自己評価し、学び方の改善につなげるといったサイクルを「習得」の授業で行えば、基礎から積み上がる学びとして探究学習にも生きてきます。

探究学習が日常的に行われるようになった今こそ、教科・科目間のつながりや、「習得」と「探究」の往還を意識したカリキュラムを、学校全体で議論していただきたいと思います。

図3 「習得」と「探究」のサイクルの関係

教えて考えさせる
「習得」の授業の進め方

1 教師の説明

一斉授業で教師が知識を説明する。

2 理解確認

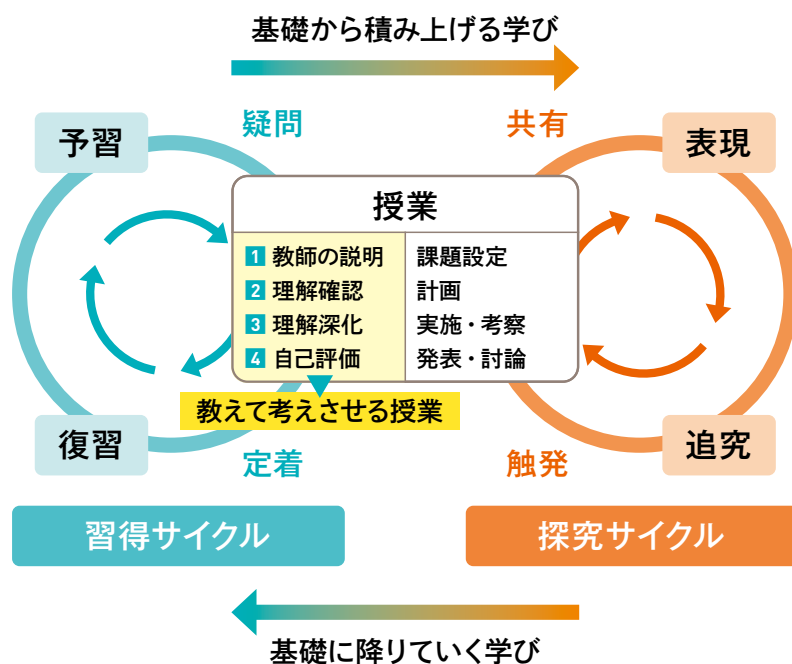
教師が説明した内容について、生徒同士で口頭で説明し合い、互いに理解できているかどうかを確認する。生徒は後輩に教えるような気持ちで伝える。教師はその様子を見て、生徒の理解が不十分な場合、改めて説明する。

3 理解深化

知識を活用して解く問題を提示。生徒は協働して取り組む。知識を理解していることは確認済みであるため、学習が得意な生徒と苦手な生徒と一緒に考えることができる。

4 自己評価

授業で「分かったこと」「分からなかったこと」「さらに調べたいこと」などを書く。自分の学びをメタ認知することは、次の学びへの意欲につながる。



※市川名誉教授の提供資料と取材を基に編集部で作成。

主体的・
対話的で
深い学び

授業実践

英語・数学

(教科横断型)

岡山県立岡山一宮高校

三尾健一 みお・けんいち

同校に赴任して2年目。
指導教諭。進路指導課。英語科。



異なる見地から
考察・推察する
力を養う

岡山県立岡山一宮高校

有岡桂佑 ありおか・けいすけ

同校に赴任して10年目。
SSH 戦略室長。総務課長。数学科。



学校概要

◎設立 1980 (昭和 55) 年 ◎形態 全日制／普通科、理数科／共学 ◎生徒数 1 学年約 320 人 ◎2022 年度卒業生進路実績 国公立大は、筑波大、大阪大、神戸大、岡山大、広島大、香川大、九州大、九州工業大などに 189 人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ 396 人が合格。

授業レポート

本時の概要

[対象] 2年生 [教科・科目] 英語・英語コミュニケーションⅡ、数学・数学B

[単元] Letters from a Battlefield (英語コミュニケーションⅡ)、確率分布と統計的な推測 (数学B)

[本時の目標] 戦局を数学的見地から考察し、兵士の心情を言語的見地から推察する。

1 本時の目標を確認

🕒 5 分間



本時の目標と育成を目指す資質・能力、さらに本時の学習が探究学習のサイクルのどの段階にあたるのかを確認。そして有岡先生から、数学の学習活動は仮説を立て数理モデルを作成することであり、三尾先生から、英語の学習活動は数理モデルを踏まえた英文の作成であることが、それぞれ説明された。

2 音読活動・事前課題の発表

🕒 5 分間



教科書の内容の意味を捉えることを意識して、リズム、テンポに気をつけながらペアで音読を行った。その後、事前課題(Why was Iwoto significant for US? Answer in detail and deeply.)として自分が書いてきた 60 words の英文をペアで発表し合った。三尾先生は、生成 AI で作成した事前課題の英文を紹介した。

3 数理モデルの検討

🕒 15 分間



有岡先生が「本文中の数値データから何が読み取れるか、数学的見地から推測し、仮説を立てよう」と、これから行う活動を説明。注目してほしい具体的な数値を例に挙げた上で、Jamboardを使ってグループで数理モデルを考えるよう、指示した。生徒は4人グループで話し合いを開始。(©Google)

4 考察した内容を発表

🕒 5 分間



第二次世界大戦における硫黄島での戦いは、兵力では日本に大きく勝るアメリカ軍の戦死・戦傷者数などの損害が、日本軍を上回った戦いだった。その事実がどれほど希有な出来事であったのかを、本文の中の様々な数値を根拠に、生徒が説明した。

授業レポートは、次のページに続きます

お
勧
め
の
分
掌

管
理
職

教
務
担
当

進
路
担
当

担
任

5 数理モデルの解説

🕒 5 分間



生徒が考察した内容を共有した後、有岡先生が、自身が考察した標準正規分布を用いた数理モデルを解説。「本文を読む時に数値データに注目することで、実際にはありえないようなことが起きたのだと理解することができ、さらに深い思考が可能になる」と、数学的見地からのアプローチの重要性を説明した。

6 心情の推察・振り返り

🕒 10 分間



生徒は「What made Japanese soldiers do this strategy? Think with emotional points of view.」という問いの答えを、数学的見地を踏まえて英文で書いた。英文をペアで発表し合った後、本单元末に行う英作文のパフォーマンス課題が提示され、授業の最後には、Google フォームを使って振り返りを行った。(©Google)

私が目指している授業

英語

英語の4技能をフルに活用することはもちろん、リズムとテンポを重視して授業を展開することを心がけています。シャドーイング、オーバーラッピング(*1)など、様々な言語活動を一覧化した「ドリルマトリックス」を生徒と共有しており、教師が説明する時間をできるだけ短くして、端的な指示で言語活動が行えるようにしています。大学入試はもちろん、生徒たちが活躍する社会では、情報を処理する力だけでなく、論理的に思考する力、そしてコミュニケーション力などの非認知能力が求められます。本校で育成を目指す資質・能力「i コンピテンシー」(下図)を意識して、普段から授業づくりを進めています。

三尾先生



数学

普段は、生徒は予習動画の視聴と予習プリントに取り組んだ上で授業に臨んでいます。生徒がグループで予習内容を確認したり、教師役になって説明したりと、生徒主体で授業は進行します。私の発問はさらに思考を深めるためのもので、「この後、先生はどんな質問ををすると思う?」「今の説明はどこで論理が破綻していると思う?」などと尋ねることもよくあります。そのように、なるべく教師が説明を行わず、生徒たちが自律的に、そして互いに切磋琢磨しながら理解を深めていく授業や、1 コマの中で核となる学びや一番面白い点に生徒が自分たちの力で気づくような授業を目指しています。

有岡先生



「科学知」を統合し、行動するリーダーを育てるため、i コンピテンシー (一宮 5 つの資質・能力) を設定

I	II	III	IV	V
情報分析活用能力	論理的思考力	コミュニケーション力	自律的に行動する力	垣根を越える力
- 情報源を確定でき、必要な情報であるかを判断する力 - 情報から結論を導く適切な手段を選ぶ力 等	- 物事を順序立てて考え、説明する力 - 課題解決に向けて様々な方法を考える力 等	- 目標達成に向けて協働する力 - 対話による議論ができ、まとめる力 等	- 意思決定を行い、計画的に行動する力 - 失敗を恐れず何事にも主体的に取り組む力 等	- 連携相手や環境に応じて柔軟に対応する力 - 様々な研究資源(人・モノ・情報)を活用する力 等

*1 シャドーイングは、英文を読み上げる音声から1、2語遅れでその英文を復唱するスピーキング、リスニングの訓練法。オーバーラッピングは、英語の音声を文字起こした教材を読みながら、流れる英語の音声と同時に発音を行うスピーキング、リスニングの訓練法。

図1 教科横断型授業の目標

数学の学習活動
本文の内容から仮説を立てて
数理モデルを作成する

◎目標

戦局を数学的見地から考察し、兵士の心情を言語的見地から推察する。

◎育成する「i コンピテンシー」

- I 情報分析活用能力
- II 論理的思考力
- V 垣根を越える力

英語の学習活動
数理モデルを踏まえて
英語で自分の考えを述べる

※学校資料を基に編集部で作成。

硫黄島での戦いについて書かれた単元「Letters from a Battlefield」を読んで、第二次世界大戦の歴史的な背景を理解するだけでなく、当時の社会状況を踏まえて、その時代に生きた人たちの心情を深く推察してほしいと考えました。そして、より深く生徒に推察させるための方法として、数学科の有岡先生とコラボレーションした授業を行いました（図1）。

本単元では、発展的な問いであり、総括的評価につながる問いとして、「これまでにあなたは、どのような不可能な状況を克服してきたか」という問いを設定しました。生徒たちは本時の学びを生かして、過去の自分の経験を振り返る際に数値データ

発問・課題設定の観点
数値データの検証で
より深い推察を
求める発問を実現



「II」におけるキー課題は、「What made Japanese soldiers do this strategy?」という問いに対する答えを英語で表現することです。本課題は、数値データを検証した後に投げかけたからこそ、「ありえないようなことが起こった」といった点も踏まえて、生徒に深い思考を促す問いとなりました。科学では解明できないことを推察するために、科学の力を借りたのです。

批判的に
考察させることで
理解をさらに深める

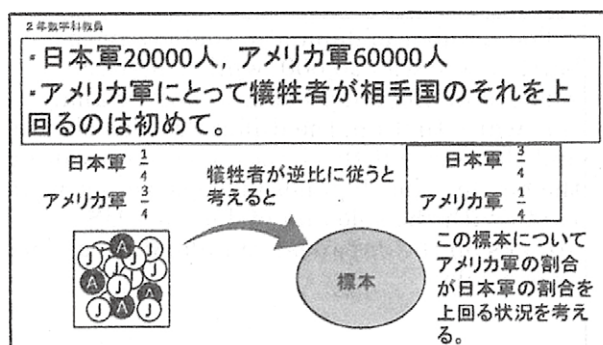


今回の教科横断型の授業は、三尾先生の「英語コミュニケーションII」の授業に、「数学B」の「確率分布と統計的な推測」の「仮説検定実習」が乗り入れる形で実現しました。

本校では、育成を目指す資質・能力「i コンピテンシー」を、探究学習だけでなく、教科の授業においても育むことを目指しており、未知のものに対して自分なりに仮説を立て、検証を行うプロセスを重視しています。そうした探究学習のサイクルは、非認知能力を育む最適な機会になります。本時の教科横断型の授業も、仮説・検証を伴う探究的な時間にしたと考えました。

本時の「数学B」におけるキー課題は、数学的見地から推測し、仮説を立てることでした。私は、数値データに注目させるスライド（図2）を見せながら、「見落としている部分はないか、もう一度考えよう」「仮説の根拠を数学の言葉を使って説明しよう」と強調しました。本文を日本語に訳して内容を理解するだけでなく、数学的に考察することで内容の理解がより深いものになり、内容の背景まで推測することができるようになるのです。

図2 数値データに注目させるためのスライド



※学校資料をそのまま掲載。

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

教科横断の 学びの評価の あり方を模索



今回の教科横断型の授業を実施するにあたり、本時の学習評価をどのように行つかについても有岡先生と話し合いました。数学的見地からの考察と、言語的見地からの推察という、内容の異なる学習活動が1コマの授業の中で行われるわけですから、例えば「英語の学習活動は満足

できるレベルで取り組めたが、数学の学習活動はいま一つのレベルだった」といった生徒が現れることも考えられます。そこで、本時の授業については、無理に学習評価を行わないこと、ただし、有岡先生が作成した振り返りフォーム(図3)を使うことで、生徒が学びの達成感を味わったり、次の学びへの見通しを持つたりすることができるようになることにしました。

本単元全体では、単元末に実施するパフォーマンステストの英作文を学習評価の材料としました。

図3 教科横断型授業での生徒の振り返り

■ 言語的見地からの振り返り

Q. 兵士の心情を言語的見地から考察することができましたか。1つだけマークしてください。

- ☐ できた。なぜなら……
☐ できなかった。だけど……

Q. ……に続く内容を書きなさい。

生徒の振り返り

- できた。なぜなら、実際にどのような場面だったかを想像し、それを授業で学んだことを生かして英文で表現することができたから。
- できなかった。だけど、兵士たちにとって母国がどんな存在であるかは分かったような気がする。

■ 数学的見地からの振り返り

Q. 戦局を数学的見地から考察することができましたか。1つだけマークしてください。

- ☐ できた。なぜなら……
☐ できなかった。だけど……

Q. ……に続く内容を書きなさい。

生徒の振り返り

- できた。なぜなら、先生のような確率の求め方(考え方)ではなかったが、比率や単純な計算で日本軍とアメリカ軍の損失について考察することができたから。
- できなかった。だけど、いろいろなアイデアを提案し、話し合いを円滑に進めることができた。

※学校資料を基に編集部で作成。

多角的に見るほど 教師の指導改善の 視点が得られる



数学と英語の教科横断型の授業はあまり事例がなかったため、検討には苦労しました。最終的には、今回の1コマは無理に複数教科の総括的評価につなげず、生徒が本時の学習活動を前向きに捉えられるような設問(図3)で自己評価をすることに

と定めることにしました。今後も教科横断型の授業に挑戦する中で、学習評価の方法についても検討を続けていきたいと思います。

本時の後、授業を見学した先生方と教科別の研究協議を行いました。そこで興味深かったのは、私が数理モデルを例示したことに対して、数学科では「最後まで生徒に考えさせるべきだった」といった声が多かったのに対して、英語科では「例示があったことで内容の理解が深まった」と評価する声が多かったことです。教師の指導改善という点でも、教科横断型の授業は様々な示唆を与えてくれるのだと実感しました。

多角的に 物事を見ることを 生徒に求め続ける



教科横断型の授業の実施後のアンケートでは、授業を見学した本校の教師や来校者からは肯定的な意見が多く見られました。今回の試みはまさに試行錯誤の繰り返しでしたが、個人的な一番の成果は、担当教科が異なる同僚と協議を重ね、新しい授業のあり方を模索する姿を同僚教師、そして誰より生徒たちに見せることができたことです。私自身、研鑽を積むことの楽しさ、そして大切さを改めて痛感しました。

今回の授業が生徒にどのような影響を与えたのかはまだ分かりません。ただ、私自身、今回の授業をきっかけに、「教科書の情報だけで満足せず、図書館で調べてみよう」「書かれた内容を別の視点で検証しよう」などと、多角的な学びを勧めることが増えました。そうした働きかけが、生徒の行動変容につながっていくはずだと信じています。



教科横断型の授業を推進するために

教科横断自体が目的ではない

●こだわったのは必然性

教科横断自体が目的ではなく、教科を横断することで深い学びが生まれることが重要だと、三尾先生、有岡先生は考えている。だからこそ2人は「連携する必然性」にこだわって単元の選定などを進めたという。

「英語と数学がコラボレーションすることに、授業を受ける生徒がどのようなメリットを感じるかと納得するのか、三尾先生と考え抜きました。『数学B』の『確率分布と統計的な推測』は様々な教科と関連づけしやすい分野ですし、英語の素材文も様々な数値データが書かれている、連携しやすいものでした。そして何より、『ありえないことがなぜ起きたのか』という、考える価値のある問いをつくることができたので、教科横断型の授業の実施の見通しを立てることができました」（有岡先生）

必然性のある教科横断型の授業の実施には進度の調整も必要になる。「ただ、教科横断型の授業をいつ、どの教科間で実施するのかを年間計画などであらかじめ決めてしま

うと、実践が表面的なものになってしまいかねません」と、有岡先生は懸念している。

●「互いの授業を見学し、学んだ」

今回の教科横断型の授業は11月に行われたものだが、準備は1学期から始めていた。

「打ち合わせを何度も行いましたし、有岡先生の授業も複数回見に行きました。英語の素材文は、社会科学や自然科学に関するものが少なくないため、他教科と連携しやすい教科だと思っていました。有岡先生と実際に打ち合わせを始めてみると、数学の専門家ならではのアイデアがたくさん出てきて、素材文の内容をこれほど多角的に考察できるのかと驚きました」（三尾先生）

同校では、有志の教師が自主的に探究型の授業を実施・公開し、授業後のミニ研修で意見交換を行う「探究チャレンジ」が、月に1.2回の頻度で行われている。そのような、教師自身が新しい挑戦を楽しむ同校の風土を土台に、今後は教科横断を促す同校独自の「STEAM シラバス」（下図）を開発するなどして、さらに教科横断型の授業のあり方・方法を模索し続けていく考えだ。

■教科横断を促進するSTEAMシラバス

学期	iC データ&ロジカルサイエンス(*2)	現代の国語	言語文化	数学I
1	【ロジカルシンキングを学ぶことで、論理的思考力を身につける】 演繹法、帰納法、論理の飛躍、暗黙の前提についての説明など基礎・基本を学ぶ。	「生きもの」として 生きる	説話 ・児のそら寝 ・検非違使忠明 漢文入門 故事成語	1. 式の計算 ・多項式の加法と減法 ・多項式の乗法 ・因数分解
	【問題解決に必要な解決手順や情報の適切な取り扱い方を身につける】 問題解決の手順や問題解決を図る際に必要となるメディアや個人情報の扱い方、知的財産権について学ぶ。	「本当の自分」幻想	随筆(1) 徒然草 ・つれづれなるままに ・神無月のころ ・ある人、弓射ることを習ふに ・丹波に出雲といふ所あり	2. 実数 ・実数 ・根号を含む式の計算

教科だけでなく、
学年も超えて
挑戦を続けたい



授業後、生徒から「あのようなスタイルの授業は、もうやらないのですか?」と尋ねられました。1つの教材を複数の教科の視点で深く学ぶ授業が楽しかったのでしょうか。また、授業後の研究協議でも、挑戦的で面白い授業という評価を多数もらいました。理科や情報との教科横断ではなく、文系教科との教科横断の具体的な事例を示すことができたのは、探究型の授業を追究する意味でも価値があったと思っています。

今後も他教科、特に文系教科との教科横断を模索していきたいと思っていますが、学年の枠も超えて学びをつなげたいと考えています。例えば、1年生の数学と3年生の国語などが可能かもしれません。連携の必然性とメリットがあるならば、これから教科横断型の授業にチャレンジしていきたいと思っています。

*2 同校の学校設定科目。物事を筋道立てて考え、根拠を示しながら意見を述べることで論理的思考力を身につけることや、データを適切に取り扱い、コンピューターを活用して情報を表現することで情報分析活用力を身につけることなどを目的としている。

能登半島地震被災者の皆様に、心からお見舞い申し上げます。

※本記事は、2023年12月の取材内容を基に作成いたしました。

2023年度でSSH（*1）の指定20年目となる石川県立七尾高校は、理数科では自然科学を、普通科文系フロンティアコース（*2）では能登の活性化を図るビジネスプランを、普通科普通コースでは能登をテーマとする探究学習を行う。1年次は実践を通じて探究のスキルを学び、2年次は生徒が課題を設定して探究に取り組む。2年次の探究学習は各学科・コースで特徴があり、例えば、理数科ではまず、生徒個々に研究テーマを考え、実験を行い、考察をまとめる。そして、各生徒の研究内容を踏まえて、さらに研究を深めるべきテーマを10個に絞り、4人ずつのチームに分かれて、いずれかのテーマの研究に取り組む。



20年度からは、3年次に学科・コース横断でチームを組み、能登の課題を見つけて方策を提案する「融合プロジェクト」（写真）を行っている。そのねらいは、三者三様に学んできた各学科・コースの生徒が協働して1つのテーマを探究することを通じて、多面的な見方・考え方の大切さに気づいてもらうことにある。同プロジェクトでは、初対面の生徒同士でチームを組むことが多いが、活発に活動し、よい提案をしたチームには、ファシリテーター役の生徒がいることが分かった。そこで22年度から、2年次にファシリテーション講座を設けている。



生徒のリアル



理数科・2年生
M・Kさん
2年次の「課題研究」では、水中の環境DNA（*3）の減少速度の解明をテーマにしましたが、実験方法を見いだせずにいました。よい方法が浮かんでも問題が見つかり、却下することの繰り返しで、担当の先生に「焦らなくてもいいよ」と言われても、つらい日々でした。そんな中、先生に「一度、川に行こう」と言われて川の環境条件を調べてみたところ、減少速度に大きな影響を与えているのは水温ではないかと気づきました。先行研究を基に水槽を使う実験方法を考えつくと、8月からは一気に研究が進みました。

先生の客観的な意見が企画を見直す鍵に
普通科文系フロンティアコース・3年生 N・Jさん
「融合プロジェクト」でリーダーを務めました。皆で議論して牡蠣ツアーを考え、各目の得意や経験を踏まえて調査や発表資料の作成などを分担し、進めました。しかし、企画の完成直前にあるメンバーが「牡蠣は月並みではないか」と言い出したのです。「それ、今言う？」といった不穏な空気に一変。このまま進めるか、変えるか。担当の先生に企画を見てもらったところ、「既にあるツアー」と指摘されました。改めて素材を探し、地元の伝統工芸・和ろうそくを作るツアーに変更。何とか納得のいく提案ができました。

探究学習の概要

生徒のさらなる成長を目指し、カリキュラムを常に進化



石川県立
七尾高校
あきのり
中村晃規



停滞や衝突があっても、
研究に誠実に向き合う生徒が
自分で考え抜けるよう、支援する

学校概要

設立 1899（明治32）年
形態 全日制／普通科（普通コース、文系フロンティアコース）、理数科／共学
生徒数 1学年約200人
2022年度卒業生進路実績 国公立大は、北海道大、東北大、お茶の水女子大、東京大、新潟大、富山大、金沢大、京都大、大阪大、神戸大などに126人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田などに延べ528人が合格。

*1 文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」。 *2 普通科文系フロンティアコースは、2012年度から石川県教育委員会「いしかわニュースーパーハイスクール」の指定。 *3 水や土壌などの中から採取される生物のDNAのこと。それを解析することで、何の生物がどの程度生息しているのか、または生息していたのかが推定できる。



研究はどんな方向に進んでもいい！ 様々な想定をして、生徒を見守る

大学で昆虫の研究に打ち込み、40歳で高校教師に転身。9年前に本校に赴任しました。それ以来、SSH担当をしています。高校生の研究であっても学術の世界のルールに準じた方がよいと考え、論文の書き方や口頭発表の作法を学ぶ講座を設けるなど、研究者だった経験を生かしてきました。

私の中には研究の理想像があり、生徒の研究の内容をそれに近づけようとする助言ばかりを以前はしていました。助言の通りにしない生徒にいらだったり、助言の通りにしても結果が想定したレベルに届かず、自分のふがいなさに落ち込んだりもしていました。しかし、探究学習は、よく言われる通り、研究結果のよしあしではなく、生徒が取り組む過程にこそ価値があると次第に理解していきました。それは、生徒が私の想定外のアプローチをし、成長する姿を何度も目のあたりにしたからです。

4年前、鏡に対するメダカの反応と行動を研究したチームは、メダカを何十時間も撮影して観察しましたが、考察は停滞していました。解決の糸口になればと、大学の魚の研究者を紹介したところ、その研究者が「たくさんのデータがあるのだから、きちんと見直せば発見があるはず」と評価してくれたのです。その言葉に生徒たちは目の色を変え、動画を見直してメダカの行動を分析。メダカが自己認識をしている可能性が高いと結論づけました。論文は「高校生バイオサミット」の文部科学大臣賞受賞の形で実を結び、何より生徒は研究の醍醐味を実感していました。

今年度、環境DNAの基礎研究をテーマにしたチームは、出だしから停滞しました。4月に研究テーマを設定後、7月の中間発表になっても実験に入れなかったのです。授業では毎週、教室にぼつんとそのチームだけが残り、先行研究などを調べる姿が見られました。チームの担当教師に「この実験方法にしました」と報告に行っても、教師が「その理由は？」と質問すると黙ってしまうといったことが繰り返されていました。

チームは相当苦しんでいましたが、担当教師とSSH主任の私は、チームが自ら実験方法を見いだすまで待とうと、意見は一致していませんでした。研究テーマから考えると、実験方法さえ決まれば、実験自体には時間はかからないと想定していましたし、1年次に副担任として生徒を見ていて、真面目で頭の回転が速いこのメンバーなら大丈夫だと踏んでいたからです。何より、学問分野として日の浅い、環境DNAの基

礎研究に貢献したいという熱意を生徒から感じていました。そしてチームは、私たち教師が思ってもいなかった、水槽を使うという実験方法を考え出したのです。さらに、実験の結果から新たな着想を得て、次の実験に突き進んでいます。

3年次の「融合プロジェクト」は、初対面の生徒同士でチームを組むため、生徒は協働して研究を進めることに苦勞しますが、そこでも教師は支援に徹します。どのチームでも起こり得る人間関係の問題は自分たちで解決しようとし、教師には第三者の視点を求めているのでしょ

う、研究内容のみを相談するチームがほとんどです。そうした姿にも生徒の成長を感じます。実は今も、助言の通りにしない生徒にいらだつことがあり、生徒とのやり取りでの後悔が夢にまで出てくることもあります。そのような度

生徒に成長してほしいから、
研究の過程こそが
大事だということを、
心に刻みつけています



なかもら・あきのり 同校に赴任して9年目。探究課SSH主任。理科(生物)。

そうだったのか！

学習評価

先生方の疑問に識者が答えます！

今号の
テーマ

評価への総括の 考え方と方法

Q 観点別学習状況の評価（以下、観点別評価）の結果を評定に総括する方法には、どのようなものがあるのでしょうか。

A A、B、C の組み合わせで総括する方法や、A、B、C を数値に置き換えて総括する方法などがあります。

評定への総括にあたり、観点別評価に係る記録が観点ごとに複数ある場合は、まずはそれらを総括します。総括のタイミングは、単元末、学期末、学年末などが考えられます。総括の方法には、評価結果の A、B、C の数を基にする方法や、A、B、C を数値に置き換える方法などがあります（下図①）。

総括した観点別評価の結果は、A、B、C の組み合わせによる方法や、A、B、C を数値に置き換える方法などで評定に総括します（下図②）。学期末ごとに評定に総括をしている場合は、各学期の評定の結果を基に学年末の評定に総括する方法もあります。

① 観点別評価に係る記録が観点ごとに複数ある場合の、その総括の方法例

評価結果の A、B、C の数を基に総括する方法

例えば、3 回評価を行った結果が「A B B」ならば、最も数が多い「B」と総括する。

	知識・技能
単元①	A
単元②	B
単元③	B
1 学期末の評価	B

評価結果の A、B、C を数値に置き換えて総括する方法

A=3、B=2、C=1 のように数値化。平均値を出して総括する。

	知識・技能	数値変換
単元①	A	→ 3
単元②	B	→ 2
単元③	B	→ 2
1 学期末の評価	B	← 平均値 約 2.3

注)「B」とする範囲を「1.5 ≦ 平均値 < 2.5」とした例。

② 総括した観点別評価の結果を基に評定に総括する方法例

各観点の評価結果を A、B、C の組み合わせにより総括する方法

例えば、総括した 3 観点の評価結果が「A B A」ならば、「4」とする。A、B、C の組み合わせと評定がどう対応するかは、事前に設定しておく。

	観点別評価の結果
知識・技能	A
思考・判断・表現	B
主体的に学習に取り組む態度	A
評定	4

A、B、C の組み合わせと評定の対応例

3 観点の評価	評定
AAA	5
AAB / ABA / BAA など	4
ABB / BAB / BBA / BBB など	3
BCC / CBC / CCB など	2
CCC	1

注) ABC の並び順は、知識・技能 / 思考・判断・表現 / 主体的に学習に取り組む態度。

A、B、C を数値に置き換えて総括する方法

A=5、B=3、C=1 のように数値化。平均値を出して総括する。

	観点別評価の結果	数値変換
知識・技能	A	→ 5
思考・判断・表現	B	→ 3
主体的に学習に取り組む態度	A	→ 5
評定	4	← 平均値 約 4.3

注)「4」とする範囲を「3.5 ≦ 平均値 < 4.5」とした例。

回答者



國學院大學

人間開発学部初等教育学科 教授

田村 学

たむら・まなぶ 専門は教科教育学、教育方法学、カリキュラム論。文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官、同省同局視学官などを経て、現職。著書に、『学習評価』（東洋館出版社）など多数。

※国立教育政策研究所教育課程研究センター『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料（高等学校編）」と、田村教授への取材を基に編集部で作成。



評定に総括する際、評価の重みを3観点で均等にせず、観点によって変えてもよいのでしょうか。



学校教育目標や教科・科目の学習目標などに準拠して、3観点の評価の重みを変えてもよいでしょう。

「目標と指導と評価の一体化」の観点から、授業づくりは、学校教育目標や教科・科目の学習目標を踏まえた単元の指導計画を立てて行われることが求められます。その成果を評価するので、目標に応じて3観点の評価の重みづけをすることは問題ないでしょう（右図）。

学校教育目標に準拠するのであれば、全教科・科目で重みづけを統一することが考えられます。一方で、教科・科目によって重視したい観点が異なるのであれば、各教科・科目に3観点の評価の重みづけは任せてもよいかもしれません。

3観点の評価の重みづけをする、しないにかかわらず、評定への総括の考え方や方法は、生徒や保護者に事前に公表するとよいでしょう。生徒や保護者への説明責任を果たせるとともに、生徒が学習の目標や計画を立てる基準となりますし、評定を自己評価できるといった利点もあります。

● 3観点の評価の重みを変えて評価する方法例

3観点の重みを変えた上で各観点を点数化し、その合計点で評定に総括する。

	A	B	C
知識・技能	25点	20点	10点
思考・判断・表現	50点	40点	20点
主体的に学習に取り組む態度	25点	20点	10点

「思考・判断・表現」と他の2観点が2:1になるように重みづけした配点を設定

評定換算表（例）

合計点	3観点の評価	評定
100	AAA	5
95	AAB / BAA	5
90	ABA / BAB	5
85	AAC / ABB / BBA / CAA	4
80	BAC / BBB / CAB	4
75	ABC / CBA	4
70	ACA / BBC / CAC / CBB	4
65	ACB / BCA	3
60	BCB / CBC	3
55	ACC / CCA	3
50	BCC / CCB	2
40	CCC	1

注）ABCの並び順は、知識・技能／思考・判断・表現／主体的に学習に取り組む態度。

COLUMN

「CCA」の評価はあり得ないのか？

「CCA」は、「知識・技能」「思考・判断・表現」がともに「C」で、「主体的に学習に取り組む態度」が「A」という結果です。3観点は強く関連しているため、評価結果に大きなばらつきは生じにくいと思われますが、『CCA』はあり得ない』とは言いきれず、『CCA』は起こりにくい』と言うのが正しいと考えます。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法が適切であるならば、その生徒が主体的に学習に取り組んでいても知識・技能や思考力などに向上が見られない場合は、その要因を探って支援することが、評価のあり方ではないでしょうか。

田村先生の
まずはここから！アドバイス



評価方法は教科・科目ごとに設定するのが一般的ですが、評定への総括の考え方や方法については、学校全体や教科・科目内で話し合い、統一するのがよいでしょう。



評定への総括の方法は、設定した後も、運用しながらその方法が適切かどうかを検証しましょう。

*本コーナーでは、9～12月の年内に試験が実施され、合否が決まること多い総合型選抜（旧AO入試）と学校推薦型選抜を、「年内入試」と総称しています。年内入試支援をテーマとしたVIEWnext高校版 2023年8月号・特集はこちら▶▶



生徒の可能性を引き出す 新進路選択支援

年内入試（*）の募集枠の拡大など、大学入試環境が大きく変化している中で、生徒がより自分に合った進路を選択できるよう、生徒の内面や可能性を引き出すことが一層重要になってきている。そうした支援においては、学校や教師には何が求められるのか、実践事例を通じて考える。

地域の人たちと深くかかわる中で、 自分の生き方や進路を考える

岡山県立おく邑久高校

同校が目指した生徒の行動変容、そのための教師の支援

生徒

BEFORE



3年次の夏季休業直前に進路変更するなど、希望進路を決められない生徒が少なくなかった。

教師の支援

- 生徒が解決したい社会問題を考えて進路選択をするよう、地域と連携した探究学習「セトリ」を実施。
- 教育活動を通じて得た自分の強みを、生徒が認識するための機会を設けた。

生徒

AFTER



自分の関心や強みを基に進路を考えられる生徒が増えてきている。

社会を深く知るために 地域で学ぶ「セトリ」を実施

3年次の夏季休業直前に進路変更するなど、希望進路をなかなか明確にできない生徒への対応が課題だった岡山県立邑久高校。進路指導課課長の矢野祥子先生は、その要因をこう語る。

「志望する学校や企業を具体的に挙げてられても、『社会人になった時に取組みたいこと』を問うと、言葉に詰まる生徒がほとんどでした。生徒は社会のことを知らないため、自分が社会に出た時にしたいことが明確にイメージできず、その中で進路決定を迫られているのではないかと考えました」

生徒が社会を知る機会を設けようと、2016年度に普通科国公立大学進学コース（*1）において、生徒が地域の人と対話をしながら地元の瀬戸内市の課題に取り組む探究学習「セトリ」をスタート。将来やりたいことを考えて進路選択をする生徒が増えてきたことを受けて、20年度には全学科に拡大した（図1）。「セトリ」は生徒の進路意識を変化させたと、教務課課長の関淳先生は語る。

「地域で実際に活動する中で、地域の課題のために自分は何ができるのかを考え、高校卒業後の自分の姿をイ

メージするようになったことが、希望進路の明確化につながったのだと思います。ある生徒は、『セトリ』で取り組んだ地域の希少生物の保全に関する研究を続けたいと、農学部に進学しました」

自己のあり方・生き方を考えるヒントをつかんでほしいという思いから、『セトリ』では、生徒が地域の人とじっくり対話をする機会を大切にしている。例えば、1年次に行く「地域人インタビュー」では、地元企業の社会人1人に生徒2～3人が約1時間、話を聞く。「人生のターニングポイント」は必ず質問し、それ以外の質問は生徒が事前に考えることとして、生徒主体の活動となるプログラムにした。

2年次に行く「地域課題解決学習」では、生徒が自分たちでテーマを決め、『地元食材の成分分析』や『災害に負けないまちづくり』などの課題に取り組む。地域の支援を受けながら地域の問題に向き合いつちに、問題を自分事と捉えて進路を考えるようになるという。

身につけた強みを認識させ、 今後の学びを考えさせる

23年度は、『セトリ』などを通じてどのような資質・能力を身につけた

*1 2019年度までは普通科に「国公立大学進学コース」「総合進学コース」を設置。20年度に普通科と生活ビジネス科（情報ビジネスコース、保育・食物コース）の2学科に改編。

図1 「セトリー～Be a SETOUCHI Leader～」の3つの Step と、主な活動

目標 ①地域と連携して、地域の問題の解決や活性化に取り組む ②地域での取り組みが現代の問題の解決 (SDGs) につながることに気づく

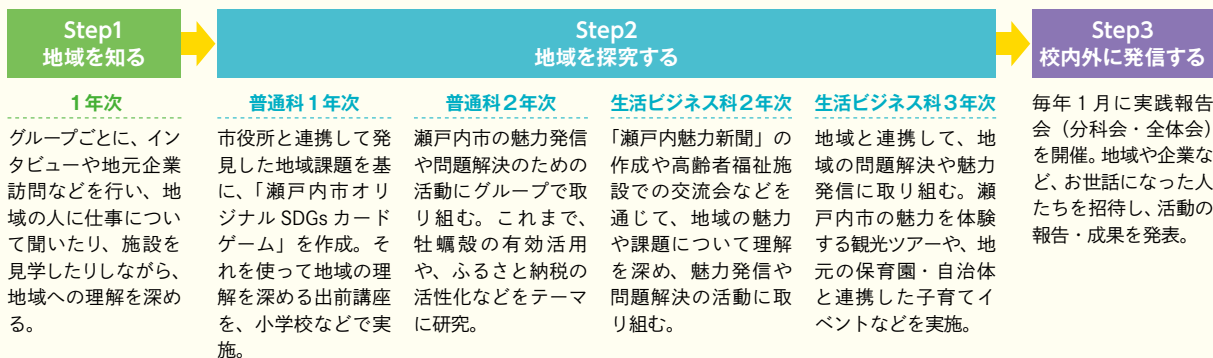


図2 生徒が振り返りで記入した「一番の強みの経験」(例)

振り返ってみよう！ (チャート結果や右上の経験説明を見て記入しよう)		1 回目 (6 月)	2 回目 (9 月)
ステップ2	(1) あなたの一番の強みの経験はどの経験か、1つ書こう。(同じスコアのもの複数ある場合は、一番強みだと思うものを書こう)	(他者理解をする) 経験	(他者理解をする) 経験
	(2) あなたの強みは、具体的にどんな場面であらわれたと思う？	①学習 ②授業 ③探究活動 ④テスト ⑤資格・検定 ⑥部活動 ⑦ボランティア ⑧海外留学 ⑨委員会、生徒会活動 ⑩その他 文化祭の時の出し物を決める時、相手の意見に合わせるようにした。	①学習 ②授業 ③探究活動 ④テスト ⑤資格・検定 ⑥部活動 ⑦ボランティア ⑧海外留学 ⑨委員会、生徒会活動 ⑩その他 セトリーが普段の授業などの班活動の時にお互いの意見を聞き、自分の意見だけでなく相手の意見もよく理解した。
	(3) これから意識して積み重ねたい経験を書いてみよう。	(試行錯誤をする) 経験	(課題克服をする) 経験

※図1・2ともに、学校資料を基に編集部で作成。



左上から時計回りに／関 淳 (教務課課長、数学科)、出射 恵 (進路指導課、1 年次担任、地理歴史・公民科)、河野正和 (1 年次主任、商業科)、矢野祥子 (進路指導課課長、国語科)

学校概要

- 設立 1921 (大正 10) 年
- 形態 全日制／普通科、生活ビジネス科／共学
- 生徒数 1 学年約 120 人
- 2022 年度卒業生進路実績 国公立大は、鳥取大に 1 人が合格。私立大は、岡山理科大、川崎医療福祉大、就実大、中国学園大、ノートルダム清心女子大に延べ 8 人が合格。短大・専門学校進学 48 人。就職 27 人。

のかを生徒が振り返る機会を設けるため、1 年次の 6 月、9 月に「進路達成プログラム」の試行版 (*2) を実施した。同プログラムの試行版の進路適性診断には、どの経験によつてどんな力を身につけたのかを記入する欄がある (図2)。その自己評価を繰り返すことで、自己を適切に捉え、自分で力を伸ばすことができるようになるのではないかと、進路指導課の出射恵先生は考えている。

「進路適性診断でまずは自分の強みを認識することが大切です。その上で、『セトリー』で他者と一緒に活動をする、例えば、自分は話すのが強みだと思つていても、友人の方が上手に話していた場面に出くわしたら、『自分の強みは何か』を考えざるを得なくなる」

「生徒が自己を深く理解することは、年内入試の面接などに向けても重要であるため、一層力を入れていきたいと、1 年次主任の河野正和先生は語る。

『セトリー』で優れた活動を行つていても、活動を通じて何を学び、それを将来どう生かしていきたいのかを、自分の言葉で表現できない生徒が少なくありませんでした。今後、生徒の自己理解力をさらに高めていくことで、活動の意義やそこから得た学びを自分の物語として語れるよう、生徒を支援していきたいと考えています」

*2 「自分の軸を持った進路選択」の達成を支援するためのベネッセの進路学習教材。邑久高校は、進路達成プログラムの試行版を実施。生徒が振り返りに用いた「一番の強みの経験」の記入欄は、2024 年に搭載。「進路達成プログラム」の詳細は、ベネッセハイスクールオンラインで紹介しています。ログインには ID と PW が必要です。下記 URL、または右の 2 次元コードからアクセスしてください。
https://bhs.benesse.ne.jp/hs_online/info/shinro-pgm/





探究学習の全校推進体制

研修や生徒の授業評価の共有を通じて、 探究学習の意義が教師間に浸透

東京都・私立神田女学園中学校高校

1分で分かる軌跡

東京都・私立神田女学園中学校高校は2018年度、全生徒が探究学習に取り組み「ニコルプロジェクト」を始めた。しかし、生徒を支援できるのは、カリキュラムを設計した一部の教師にとどまり、全校体制の取り組みにはなっていない。そこで22年度に、全教師が講師役となり、探究学習をテーマにした校内研修を実施し、支援ノウハウを共有。さらに多くの生徒が探究学習を高く評価していることをデータで示し、探究学習の意義を教師間に浸透させた。今では探究学習が、同校の教育活動の軸に据えられるまでになっている。

#教師のチーム・ビルディング
#大学等との外部連携

学校概要

設立 1890（明治23）年
形態 全日制／普通科／女子校
生徒数 1学年約150人
2022年度卒業生進路実績
4年制大は、國學院大、駒澤大、上智大、成蹊大、東京女子大、東洋大、日本女子大、法政大、武蔵野大、明治大、立教大、早稲田大、立命館アジア太平洋大などに延べ98人が合格。海外大合格延べ6人。

変革の背景

よりよい探究に導くための 知見の教師間での共有が課題

2015年度 東京都・私立神田

女学園中学校高校はグローバルクラスを設置し、同クラスで探究学習をスタートさせた。18年度には全校に拡大。その後、「ニコルプロジェクト」（以下、NCL*）と命名した。教務部部長の池田幸代先生は、NCLの進め方を次のように説明する。

「本校では、世界と社会に貢献する人材を育成するために、主体的に行動する力を生徒が身につけることを目的としてNCLを始めました。生徒は、自分が疑問に思うことから課題を見つけて仮説を立て、グループや個人で調査や実験などをします。『日本人と神様のつき合い方』『アロマテラピーについて』など、実に様々なテーマで探究しています」

自分の興味・関心を突き詰めて設定した課題に取り組む中で希望進路を明確にしていく生徒の姿などに、教師はNCLの手応えを感じてい

た。しかし、探究学習担当の教師が用意した指導案や教材の通りに授業を行う方法が常態化し、教師が一丸となって取り組んでいるとはいい難かった。進路指導部部長の志村穰先生は次のように語る。

「探究学習では、教師が生徒一人ひとりの学びに目を配りながら、生徒が自分で考え、気づき、探究を深められるような助言をすることが重要ですが、それがうまくできる教師は多くありませんでした。生徒の探究をよりよいものにするための知見を全校で共有する必要がありました」

変革の一手 ①

全教師が講師役となり、 探究学習に関する研修を実施

そうした課題を踏まえて22年度、職員会議や教科会、長期休業中の研修会において、探究学習をテーマとした研修を計11回、1回10分～90分で、約11時間実施した。芦澤康宏校長は、研修の実施の背景をこう語る。

「それまで一部の教師には、『NCL

校内研修のテーマ（抜粋）

- ・問いを深めるための対話とグループワーク
- ・研究方法と著作権
- ・中間発表と生徒間の情報シェア
- ・ショートディスカッション指導
- ・見やすいスライドの作成指導
- ・手が止まっている生徒へのアプローチ
- ・できる生徒へのアプローチ
- ・NCLと教科横断
- ・NCL AWARDSの最低目標ラインの共有

※学校資料を基に編集部で作成。

は探究学習の担当者を中心に行えばよい」といった受け身の姿勢が見られました。NCLが自分事となるよう、研修の講師役はあえて探究学習担当の教師ではなく、全教師に分担して務めてもらうことにしました」

研修のテーマは「手が止まっている生徒へのアプローチ」など、探究学習の指導で教師が対応に苦慮しているものとした（図1）。講師役となった教師には、探究学習に関する論文を読み込んだり、研修で行うワークを考えたりといった準備が求められた。教務部探究主任の江森華子先生は、次のように語る。



江森華子
教務部探究主任
えもり・はなこ
同校に赴任して3年目。社会



古渡美奈
スポーツ探究担当
こわたり・みな
同校に赴任して15年目。保健体育科。



奥田礼章
広報部部長
おくだ・のりあき
同校に赴任して7年目。数学科。



志村穰
進路指導部部長
しむら・みおる
同校に赴任して2年目。数学科。



池田幸代
教務部部長
いけだ・ゆきよ
同校に赴任して10年目。理科。



芦澤康宏
校長
あしざわ・やすひろ
同校に赴任して5年目。

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

* NCL は、Nature (自然)、Culture (文化)、Life (生命) の頭文字。社会のあらゆる課題の中からその3つにかかわるテーマを設定して、探究に取り組むこととした。

「講師役の教師の中には、グループ内の対話に参加できていない生徒を支援できなかったことなど、自分の失敗談を交えながら、指導のあり方を提案した者もいました。参加者の教師は、『私もそつだ』『そうすればよいのか』などと共感し、前向きに自身の指導改善に取り組めるようになっていきました。研修後に教師間で、探究学習の指導法について情報交換を行う様子もよく見られました」

生徒がNCLを高く評価していることも、探究学習に対する教師の意識を変えるきっかけとなった。同校は22年度から毎学期、オンラインアンケートツールで、生徒にNCLに関するアンケート調査を行っている。その質問項目の1つの「NCLの活動は将来役に立つ」の肯定率は、毎回9割前後だという(図2)。

「中学校1年次から探究学習に取り組んできた生徒が高校3年次になった21年度ごろから、生徒の教科学習に対する姿勢も、『教師から言われてやるもの』から『自ら課題を見つけてやるもの』に変わったと感じています。例えば、授業で理解できなかった点があると、以前は『分

かりません』と言っただけでしたが、今は『ここまで理解できましたが、この部分が分からないので教えてください』などと言うようになりました。探究学習で身につけた学びの姿勢が教科学習に生きている様子を見て、多くの教師が『本腰を入れてNCLに取り組む必要がある』という意識を持つようになっていきました(池田先生)

ここも変革

生徒の学びを深化させるべく、外部連携を積極的に推進

同校は、外部リソースの活用を積極的に推進している。その1つが高大連携だ(写真)。首都圏以外にも北海道、石川県、京都府、長崎県など、全国63大学・短期大学と連携協定を締結。様々な大学と連携することで、NCLで専門性の高いテーマを設定した生徒が、そのテーマに関する分野の大学教員に直接指導を受けられるようにした。連携先の大学教員を審査員とした校内発表会も開催している。

連携先は現在も拡大中だ。芦澤校長らが生徒の研究レポートなどを手に1大学ずつ訪問。連携を依頼すると、大学側は高校生とつながりを持てるなら、前向きに検討してもらえることが多いという。

「全国の大学には、魅力的な研究に取り組む研究者が大勢いますし、オンラインを活用すれば、地理的な制約は越えられます。また、生徒の進路意識を東京以外の大学に向けさせることも、全国の大学と連携するねらいの1つです。大学と協働して、大学訪問や講義の受講、連携先が一堂に会する進路ガイダンスの実施など、大学を詳しく知る機会も設けています」(芦澤校長)

生徒の学習習慣の定着を目的とした放課後の学習支援においても、外部リソースを活用している。東京個別指導学院と連携し、同社から派遣される大学生メンターが生徒を個別指導している。

「教師だけでは、放課後に生徒につきっきりで指導することは難しく、大学生メンターに補ってもらっています。外部連携で大切なのは、任せきりにしないことです。学年ごとに学習内容や課題は異なりますから、各学年のニーズを連携先にきちんと伝えることで、目標や課題がきちんと共有されるようになり、生徒は積極的に放課後学習に参加し、学力も向上しています」(池田先生)

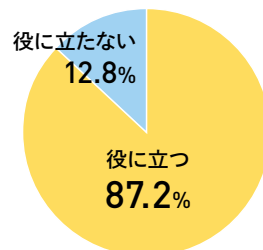


写真 連携先の亀田医療大学で、2泊3日の研修を実施。生徒は世界最先端の医療現場で模擬講義や演習などを受け、現役の看護師から医療について学んだ。高大連携によって、学びの場は毎年広がっている。

図2

NCLに対する生徒の声

Q. NCLの活動は将来役に立つと思いますか



Q. NCLの活動で何を学びましたか

- 深く突き詰めていくことを前提とした「よい問い」を生み出すことの難しさや、その問いを追求することの楽しさを学んだ。それらは社会に出て行うことだと思うので、高校生のうちに経験できてよかった。
- SNSでは似たような情報ばかりが出てくるので、「これはこうだ」と決めつけてしまいがちだった。しかし、本を読んだり、友人や先生と意見交換をしたりしたことを通じて、物事をいろいろな面から見ることの大切さに気づいた。

※学校資料を基に編集部で作成。

変革の一手 ②

部活動も探究学習と捉え、「スポーツ探究」を設置

23年度には、NCLの目標と育成を目指す資質・能力を教師間で共有するため、「NCL指導評価ルーブリック」を作成。各学年にNCLリーダーを配置するとともに、他の教師も何かしらの役割を担うこととし、探究学習の全校推進体制を整えた。

さらに、部活動も探究学習の一環と捉え、「スポーツ探究」も始めた。まずは全国大会で優勝経験のあるサッカー部が、探究学習の手法を取り入れて活動している。スポーツ探究担当で、同部顧問の古渡美奈先生は次のように語る。

「自分で目標を設定し、様々な課題に取り組むプロセスは、部活動も探究学習と同じです。部活動では何事も自分で発見する姿勢が大切で、『スポーツ探究』では『本当に知りたい自分だけの発見』を求めています。生徒は毎日の発見を『部活ノート』につづり、教師とノートをやり取り

する中で得た新たな発見を学習にも生かしています。『知りたいことへの情熱』は想像を超えた活力となり、学校生活をより豊かにしています」

変革の成果と展望

教科学習と探究学習の連携のあり方をデザイン

教師が丸となってNCLに取り組むようになったことは、教科指導にも好影響をもたらしていると、広報部部長の奥田礼章先生は語る。

「かつての本校の教師は、生徒にすぐに答えを教えがちでしたが、今は生徒が自分なりに答えを出すまで待てるようになりました。それはNCLの中で、教師が生徒の前ではなく後ろに立ち、自分で答えを見つけ出す生徒の様子を見守る経験を積んだからだと思います。『本校の生徒なら、自分で答えにたどり着こうとするはず』と、これまで以上に生徒を信頼するようになりました」

教科の授業でも、従来の講義型ではなく、教師が生徒に問いかけ、考

えさせるスタイルが増えてきているという。そうした成果を得て、次の一手としてはカリキュラム・マネジメントを強化していきたいと、志村先生は語る。

「生徒の探究学習をさらに充実させるために、各教科では何をどのよう to 指導すべきなのか、NCLと教科学習の連携のあり方をデザインしたいと考えています。例えば、英語の授業ではネイティブの教師による

ライティングやスピーキングの指導を強化し、NCLでは英語での論文作成や発表を行ったり、数学の授業で身につけた確率・統計に関する知識・技能や見方・考え方を、NCLでの調査結果の分析に活用したりするといった連携です」

同校は24年度にカリキュラムを改訂し、一部のコースではNCLの単位数を増やす予定だ。同校の探究学習は、これからも進化していく。

ベネッセが見た軌跡

生徒の活動を支える先生方のチーム力の強さ

本記事を読んでいただいた方に、「神田女学園チームの強さ」が伝わっていたらうれしく思います。先生方一人ひとりが強い挑戦心を持ち、改革の推進役の先生だけでなく、推進役を支える先生方も大変前向きで、チーム力が強い学校だと感じています。

芦澤校長は、「困難な課題に対しても生き生きと取り組む本校の教師には大変感謝している」と話され、その際に周りにいらしゃった先生方は、「芦澤校長は何事も現場に任せてくださるし、意見もたくさん聞いてくださる」と言われていました。そのような先生方の明るく和やかな雰囲気は、きっと生徒たちに伝わるのでしょう。学校に訪問させていただく度に垣間見える彼女たちの横顔はとても明るく、伸び伸びとそれぞれの活動に打ち込んでいる様子がうかがえます。

活気にあふれる学校づくりを引き続きご支援していけるよう、私も精進して参ります。

(株)ベネッセコーポレーション 東京支社
神田女学園中学校高校担当 竹下友梨



進路・キャリア×探究セミナー レポート

探究・進路学習を生徒の「マイ・ストーリー」の構築につなげるためのポイントとは

— これからの「総合的な探究の時間」と進路学習について考える —

総合型選抜や学校推薦型選抜（以下、年内入試）では、生徒は志望理由書や面接などを通じて、これまでの学びや活動、その成果や結果に至るまでの過程、今後の展望である「マイ・ストーリー」を、他者に伝えることが求められる。そこで、ベネッセ教育情報センターでは、探究学習と進路学習の2つの視点から「マイ・ストーリー」を構築する力を育んでいる事例を紹介するウェブセミナーを実施した。

探究学習・進路学習における課題

多くの教師が感じる

「探究学習と進路学習の連携」の難しさ

2つの視点で

「マイ・ストーリー」を描かせる

年内入試において大学側が最も重視しているのは、明確な志望理由を含む「マイ・ストーリー」の構築である。そこで期待されるのが、探究学習と進路学習の連携だ。「総合的な探究の時間」の「学習指導要領解説」（*1）には「自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し、解決していくような学び」が求められると述べられており、探究学習は進路・キャリアと

密接な関係にあることが読み取れる。

しかし、「探究学習を頑張った生徒でも、探究学習での学びや経験を、将来どのように生かしたいかをなかなか言語化できない」「探究テーマが学部や職業選択につながる生徒が少ない」といった全国の教師の声が示すように、生徒の探究学習と進路学習における学び・経験をうまくつなげられていないのが現実だ。また、今回のセミナー参加者へのアンケートで「総合的な探究の時間」における進路指導部のかかわりについて聞いたところ、「特にない」

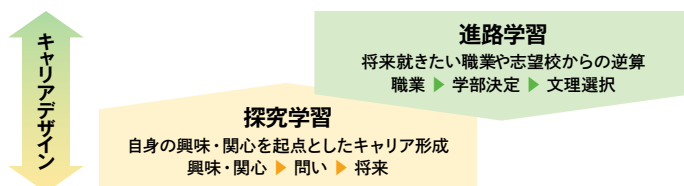
という回答が最も多く見られたことから、進路指導部と探究学習を担当する分享との組織的な連携も課題だ。

「総合的な探究の時間」と進路学習は、それぞれの目的が、進路選択における自分の軸を見つけ、将来どのように生きていきたいかを生徒が考えるという点で共通している。そこで「総合的な探究の時間」と進路学習の連携を深めるヒントを得るべく、今回のセミナーでは、熊本県立宇土中学校・宇土高校の実践事例を紹介した。

将来就きたい職業や志望校を起点にした「なりたい自分」と、探究学習で明らかにした興味・関心を起点にした「したい自分」という2つの視点（図1）からの「マイ・ストーリー」構築の支援について、次ページから見えていく。

進路と探究、2つの視点でキャリアをデザインする

図1 2つの視点からの「マイ・ストーリー」の構築



将来就きたい職業や志望校からの逆算的な視点（＝なりたい自分）と、自分の興味・関心を起点とした視点（＝したい自分）の2つの視点から「マイ・ストーリー」を描く。

※セミナーの内容を基に編集部で作成。

*1 文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」

探究から進路・キャリアへ

何がつながるのか、何をつなげるのか

熊本県立宇土中学校・宇土高校 後藤裕市

探究学習で

生徒の過去と未来をつなぐ

宇土高校では2023年度、探究学習の推進において中心的役割を担ってきた研究開発部と進路指導部を統合し、探究部とした。探究部の部長であり、進路指導主事の後藤裕市先生は、「進路の目標を早期に明確にした上で、そこに到達するために必要な力を身につけていきたいが、1年次から目標が明確になっている生徒は少ない。また、興味・関心のあるテーマで探究学習に取り組んでも、それだけでは将来の目標につなげにくい。だからこ



熊本県立宇土中学校・宇土高校
後藤裕市
（ごとう・ゆういち）

同校に赴任して12年目。探究部長・進路指導主事・指導教諭。理科（生物）。

探究テーマから自分の思いや強みに気づかせる

図2 自分と探究テーマの関係を整理するシート

モジュール	観 点	ロジックリサーチ
I-1	Innovative (革新性)	感覚の変化 自分の認識・感覚を変えるレポートができる

テーマ設定の際、自分自身と探究する内容の間にはどのような関係があるのかをみつめましょう

1. テーマ設定
「ロジックリサーチ」テーマ調査用紙に「テーマ」と「探究概要」を記入して提出します。探究概要では、探究の方向性や題材を中心に簡単に記述してください。

2. テーマ設定の背景と関連事項
「ロジックリサーチ」のテーマの背景と関連事項について、整理しましょう。

テーマ
自身の興味・関心との関連（テーマ設定の動機）
自身の経験・体験との関連（主に高校入学前）
自身の経験・体験との関連（主に高校入学後） 授 業 ロジックプログラム（科学史講座・前年度発表会など）
自身の将来・目標との関連（主に高校卒業後）

探究テーマについて、「興味・関心との関連」「高校入学前の経験・体験との関連」「高校入学後の経験・体験、授業との関連」「将来・目標との関連」の4つの視点で深掘りし、探究テーマを自分事化させている。

※学校資料をそのまま掲載。

そ、ベクトルの異なる2つのアプローチの両方を大切にすることで、生徒の主體的なキャリアデザインを支援できるのではないかと考えた」と、組織改編のねらいを振り返った。

新設した探究部では、生徒と保護者

に対して、志望理由書や自己推薦書は進学であっても就職であっても求められるものであることと、それらの書類や面接などを通じて、過去の経験から未来のビジョンまでをつなげて「マイ・ストーリー」として語ることが求められることとを丁寧に伝えていくという。

同校では、探究学習を通して育成を目指す資質・能力を「LOGIC」（＊2）として整理し、高校1年次の前半

に1人1テーマの探究学習に取り組ませる。1年次の後半は個人またはグループでプレ課題研究に取り組みさせ、2年次、3年次の課題研究に発展させる。また、インターンシップや外部研修などの機会を通して、大学の研究者や自治体、企業、地域の社会人と接することで、生徒は探究テーマを深めながら、自身の将来に関連する問いを見つける。

探究テーマは、過去の経験や体験、将来の目標と関連づけながら設定されている（図2）。また、生徒が自分の価値観や経験、強みを、質問カードやチェックリストといった学校独自のツールを用いて自己評価や相互評価をする機会を設け、自らが立てた問いと過去の経験や将来との関連に気づかせる振り返りを実施している。

そして、マインドマップなどを使って探究学習での様々な学びや経験を教師と対話をしながら振り返る中で、進路の新たな可能性に気づく生徒も多くなる。「マインドマップの中心にある探究テーマではなく、探究テーマから派生した事柄が進路選択につながるケースも少なくない」と後藤先生は語った。

*2 LOGIC=Logicity（論理性）、Objectivity（客観性）、Global（グローバル）、Innovativeness（革新性）、Creativity（創造性）

探究学習での成長を

進路検討会の資料に盛り込む

23年度からは進路検討会のあり方も変わった。進路検討会で配布する資料には、探究テーマや取り組みの内容、キャリアデザインの意向、身につけたコンピテンシーを盛り込むようにした(図3)。進路検討会には、過去に対象の生徒の探究学習にかかわった教師も参加し、探究学習の成果を生かすことができる進路はどこかを複数の教師の視点で検証し、生徒にフィードバックしているという。

探究学習と進路学習の連携が進む同校だが、探究学習のテーマや研究内容を年内入試につなげられる生徒が増えることだけを期待しているわけではないと後藤先生は説明する。現状、大学でも探究テーマに継続して取り組むことを希望して進路を選ぶ生徒は1、2割程度で、多くの生徒は、探究学習の取り組みを発展させるとどのような研究分野や研究スタイルとマッチングしそうかという広い視点で進路を選んでいる。それは、探究学習を通して、自分の価値観や経験、強みを、生徒が言語化できているからだと後藤先生は考

えている。「探究テーマが直接進路につながるなくても、探究学習を通して身につけた積極性や調整力などの資質・能力を自分の武器として打ち出し、進路を実現する生徒が増えてきた。探究テーマと異なる学部・学科に進む生徒は今後も増えるだろう」と後藤先生は展望を語った。

同校では、「総合的な探究の時間」以外の授業も探究型にしていくなため、全教科で探究の「問い」を作る授業改善に取り組んでいる。年度当初に全教師が参加して、探究型の授業づくりの研修を行うことができているのも、探究学習が生徒の進路実現に大きくかわっているという共通認識が校内に醸成されているからだと後藤先生は説明した。今後は、探究学習で蓄積された活動記録を進路学習に還元するデータベースのあり方や、探究テーマとは異なる文献を読んだり、小論文を書いたりして生徒の視野を広げさせる指導を検討していきたいという。

学校ぐるみで生徒の

「マイ・ストーリー」構築を支援

宇土高校では、探究学習と進路学習

キャリアデザインの視点で進路検討会を実施

図3 3年次 10月の進路検討会資料(抜粋)

◎キャリアデザインに関する生徒の意向

【現在】志望する自分	●●大学●●学部●●学科
【未来】ヴィジョン	地熱エネルギーの普及に向けた地熱発電の課題解決や新しい再生可能エネルギーの開発にかかわる研究がしたい
【将来】学びたいこと	世界の資源や環境にかかわる問題 発電の仕組み 非在来型資源の利用
【過去】経験・体験	熊本地震の経験 環境問題の解決に向けてSDGsなどの取り組みが世界で行われていること

◎探究学習テーマ及び実績

探究活動	活動歴・実績
ロジックリサーチ 睡眠とストレスの関係	●●年●月 ●●研究発表会(県内高校生対象)
ブレ課題研究 睡眠と記憶の関係	●●年●月 ●●大学と研究に関するディスカッション
課題研究 昼寝に最適な音楽を探る	●●年●月 ●●大会国際会議(オンラインで英語発表)

を担当する分掌が統合し、将来就きたい職業や志望校を起点にした「なりたい自分」と、自身の興味・関心を起点にした「したい自分」という2つの視点から生徒の進路観の醸成を促す体制を整えた。そして、探究学習における学びや経験と、それらを通じて身につけた力や将来とのつながりを自覚させ

ることで、今後、自分はどう生きていきたいかを、探究学習の振り返りを通じて生徒が展望を描けるようにした。さらに、探究学習における生徒の変化や成長を、進路検討会などを通じて教師間で共有し、生徒の「マイ・ストーリー」の構築を、学校全体で支援するようになっている。

3年次 10月の進路検討会で配布する資料には、生徒の希望進路や評定、模擬試験の結果といった、以前から活用していた情報に加えて、高校で取り組んできた探究テーマや取り組みの内容、育成を目指す資質・能力に関する評価スコアなどを盛り込んでいる。進路検討会の資料は、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』(<https://view-next.benesse.jp/view/cat/bkn-hs/>) からダウンロード可能。



※学校資料を基に編集部で作成。

まとめ

内省で過去・現在・未来をつなげ、「マイ・ストーリー」を構築する

探究学習のプロセスの中に

進路につながる内省の場をつくる

そもそも明確な志望理由を含む「マイ・ストーリー」とはどのようなものなのだろうか。例えば、「幼少時に病気で入院したことがあり、それがきっかけで看護師に憧れるようになった」といった過去の経験から、ある職業を目指す生徒は少なくない。しかし、高校時代のどのような学びや経験が、自分の志望を確かなものにするにつなげたかを内省しなければ、過去・現在・未来を貫く明確な志望理由を含む「マイ・ストーリー」にはならない。

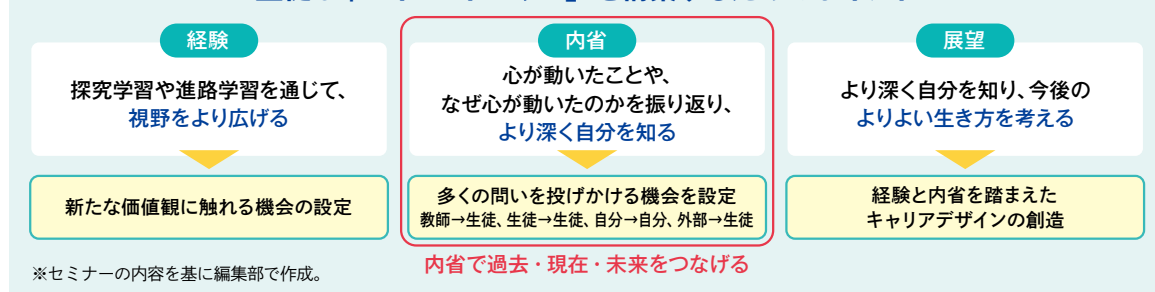
つまり、生徒が探究学習を始めとする高校時代の学びや経験を内省し、過去・現在・未来のつながりを見いだしていくことで、「看護師という職業で得られる喜びが自分にとって大きな意味を持つことを、探究学習の中で経験した〇〇で確信した」といったように、

明確な志望理由を含む「マイ・ストーリー」として語ることができるようになるだろう。

また「マイ・ストーリー」の構築によって、自分の進路を幅広く考えることもできるようになる。例えば、高校時代の探究学習の中での様々な経験を通して、自分が生きていく上で大切にしたい価値観に気づくことができれば、「看護師だけではなく、心理学や社会学からもアプローチができるかもしれない」などと、進路の選択肢を広げていくこともできるだろう。

探究学習での学びや経験を軸に、生徒が自分の過去と未来をつなぐためには、探究学習を充実させるだけでなく、探究学習のプロセスの中に、進路につながる探究学習での学びや気づきを繰り返し内省させる場をつくることが重要であるということを、宇土高校の事例が示している。

生徒が「マイ・ストーリー」を構築するためのポイント



2023年度 進路・キャリア×探究セミナー

これからの「総合的な探究の時間」と進路学習について考えるアーカイブページのご案内

多くの学校から『総合的な探究の時間』に力を入れて取り組んではいるものの、従来型の進路学習との両立が難しい」といった声を伺う中で、本セミナーでは、低学年次における「総合的な探究の時間」を軸にしながら、生徒の明確な志望理由の支えとなる進路・キャリア観をいかに醸成するか、実践事例を基にそのポイントをご紹介します。下記のセミナーアーカイブページより、ぜひ詳細をご覧ください。

https://bhs.benesse.ne.jp/hs_online/sidou/shinkatei/article/20231206_sougotekitankyu/

アーカイブ動画・資料公開！

◎本セミナーで紹介した、進路・探究・小論文学習ができる統合型デジタル教材「キャリアナビ」の詳細は、右の2次元コードまたは下記 URL からご覧ください。

https://www.benesse.co.jp/tankyu/career_demo/taiken_top.html



働き方改革

生き生きと働き続けられる
学校づくりへの挑戦「働きがい改革」を提唱する識者が、学校の働き方改革の
実践をバックアップ。その実践の背景や具体的な取り組み、
そして成果と課題を、複数回にわたってレポートします。

アドバイザー

愛媛大学大学院教育学研究科 教授

露口健司 つゆぐち・けんじ

主な研究テーマは、学校組織のリーダーシップ、学校組織のウェルビーイングとワーク・エンゲイジメントなど。国立教育政策研究所客員研究員、中央教育審議会「質の高い教師の確保特別部会」臨時委員等も務める。近著に、『教員のウェルビーイングを高める学校の「働きやすさ・働きがい」改革』（教育開発研究所）。

熊本県立
菊池高校編

第2回

働きがいを高める業務改善 趣旨の共有と 段取りの可視化で 目的意識を醸成

課題を基に行事の目的を 各自が考える機会を設ける

楠田 2023年8月の校内研修で
行った業務分析（※1）を基に整理し
た、働きがいを高めるための課題につ
いて、改善に着手しました（課題整理
の過程は、23年12月号の本コーナーで
紹介）。課題の1つである、職場の風
通しをよくするための教師間の情報共
有について、次のように進めました。

(1) 23年12月末に職員会議を行うこと
を、主な学校行事が終わった10月末、
校内で事前に周知。主な議題は、22
年度の総括や分掌間の連携が不十分
で、23年度は準備が滞った「菊高
ジャック」※2の24年度の開催形態。
(2) 11月、各分掌と各学年団で同行事の
成果と課題を話し合ってもらい、そ

の結果を基に、菊高ジャック実行委
員会が24年度の開催形態案を作成。

(3) 開催形態案を運営委員会で審議した
上で、12月末に職員会議を実施。

露口 各教師が事前に課題や成果につ
いて議論することを通じて、同行事の目
的を考えられるようにしたわけですね。

楠田 3年前、商業科の探究の場とし
て始まった同行事の趣旨を踏まえる
と、2学科合同実施には無理があると
職員会議で合意が得られ、同行事は商
業科のみで行うことに決まりました。
同行事の趣旨に立ち返ることで、開催
形態が確定し、教師間に前向きに取り
組む雰囲気醸成されたと思います。
ただ、情報共有であっても会議を増や
してよかったのか、気になっています。
露口 情報共有については、「合意形
成」と「事実の伝達」に分けて考えまし

第1回の記事は下記のURL、
または2次元コードからア
クセスをご覧ください。



https://view-next.benesse.jp/view_section/bkn-hs/article18098/

学校概要

設立 1908（明治41）年
形態 全日制／普通科・商業科／共学
生徒数 1学年約130人
2022年度卒業生進路実績 国公立大は、宮崎大、熊本県立大に2人が合格。私立大は、九州共立大、九州看護福祉大、九州ルーテル学院大、熊本学園大、崇城大などに延べ19人が合格。短大・専門学校進学45人。就職40人。



教頭
楠田美和
くすた・みわ
同校に赴任して1年目。地理
歴史科（世界史）。

う（図①）。合意形成は対面の会議で行
うことが適切ですが、事実の伝達はI
CTを使って行うのもよく、その方
が効率的です。また、行事の開催形態
が決まったら、次はいつまでに何をす
るのか、当日までの段取りの可視化が
必要です（図②）。見通しが立つと主
体的に業務を進められますし、運営上
の問題を洗い出すやすくなります。

生徒本位の教育活動を突き 詰め、働きがいにつなげたい

楠田 負担感のある業務に上がった生

※1 業務分析の方法は、本誌10月号の本コーナーをご覧ください。

https://view-next.benesse.jp/view_section/bkn-hs/article17369/ または右の2次元コードからアクセスしてください。



※2 生徒が地域貢献を目的に企画・運営するイベント。2021年度に国立教育政策研究所「教育課程研究指定校事業（商業）」の指定を受けて、同年度に商業科が開催し、生徒が企画した婚活イベントや子どもの職業体験などが行われた。22年度から普通科も加わった。

図 働きがいを高めるための業務改善の工夫

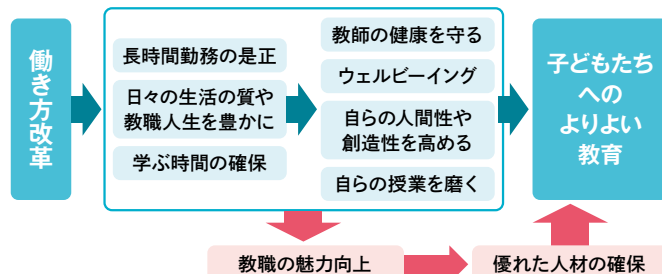
- ① 情報共有は「合意形成」と「事実の伝達」に分け、適切な方法で
教師間の「合意形成」は対面の会議で行うことが適切だが、「事実の伝達」はICTを使って行うのもよく、その方が効率的。また、対面の会議では建設的な議論ができるよう、事前に議題や問題点を伝えておく。
- ② 取り組みの段取りを可視化し、ICTを活用して校内で共有
改善・修正する取り組みは、分掌・教科・学年ごとにいつまでに、何をすべきかといった実施計画を立て、校内で共有する。ICTを活用して進捗を記録しておく、次年度の運営の参考にもなる。「プロジェクトタイムライン」などのキーワードでウェブ検索をして、入手できるビジネスのノウハウから好みのものを探す。その通りにしなくても、考え方が参考になることがある。
- ③ 取り組みの目的を再度確認・共有する
目的と手段を履き違えることは起こりやすい。「文化祭の目的は何か」「生徒指導は何のために行うのか」など、「あたり前」のことこそ目的を再確認し、教師間で共有したい。
- ④ 取り組みを少人数で始め、周りを巻き込む形で広げる
学校全体で推進することが難しい状況であれば、その取り組みに関心のある少数の教師でまずは始めてみる。理解を示しそうな教師に成果を伝えて取り組みに引き込み、徐々に実践を広げていく。

※露口教授の取材を基に編集部で作成。

管理職としての心がけ 露口教授からのアドバイス

教師一人ひとりにとってベストな働き方を自分で築いていけるような支援を

Q. なぜ、学校に働き方改革が必要なのでしょう



※文部科学省『「緊急提言」を踏まえた文部科学省からの発信について』（2023年9月）を基に編集部で作成。

働き方改革では、長時間勤務の是正に関心が集中していますが、それは働き方改革で行うべきことの1つです。2023年9月に文部科学省が改めて発信したように（※3）、学校における働き方改革では、教師自身が日々の生活を豊かにし、自己研鑽を積んで人間性や創造性を高めて、「子どもたちへのよりよい教育」を行うことを目指しています。時間外勤務時間が少なくても教職にやりがいを感じていなければ、担当業務を配置し直す必要があるかもしれません。働きがいを感じていても自己研鑽の時間を確保できていないのであれば、業務の効率化を検討すべきでしょう。

教師は高度専門職であり、時短が主目的の「働きやすさ」だけを目標すべきではありません。教師一人ひとりが自分にとってベストな働き方を自分で築いていくことが重要であり、それを支援するのが管理職の役割だと思います。まずは先生方との面談で上記の図を示して、「仕事で何を重視していますか」「どのように働きたいですか」などと問いかけてみましょう。教職人生で何を重視するかは、教師一人ひとりで異なります。それを見いだす支援をすることで、真の働き方改革が実現するのだと思います。

徒指導については、生徒に規則を守るだけの指導では限界があることを職員会議で伝えましたが、「厳しい指導にも意義がある」と訴える教師がいるなど、教師それぞれに考えがあり、改善の方策は見いだせていません。

露口 整容指導などは大変な割に成果がないといった先生方の声を踏まえ、と、「菊高ジャック」と同様に、教師間で生徒指導の目的を徹底的に議論することが必要だと考えます（図③）。

楠田 本校が育成を目指す生徒像を、いま一度共有することが必要かもしれません。校内で粘り強く対話を重ねて目線を合わせたいと思います。

露口 私も大学で業務改善を担当しているので実感していますが、すべての教師で改善の目的を共有することが難しい場合もあります。その時は、改善に意欲的な教師だけで取り組みを始め

することも1つの方法です（図④）。少しでもよいので成果を上げ、それを共有して賛同者を増やし、徐々に改善の規模を広げていくのです。

また、教師の業務軽減と働きがいの向上を両立させる施策として提案したいのが、生徒の主体性を生かした学校運営です。例えば、学校行事を生徒主体の運営とし、上級生が下級生に運営方法を継承することが考えられます。

生徒指導の必要性が高い状況ですと生徒主体の行事運営に躊躇（ちゅうちゅう）されるかもしれませんが、生徒が主体的に活動することは生徒の成長にもつながります。

楠田 学校行事の円滑な運営が教師の働きがいにつながるとばかり考えていましたが、確かにその通りです。生徒主体の教育活動を突き詰めていくことが、教師の働きがいの向上にもつながるかもしれません。

* 3 文部科学省『「緊急提言」を踏まえた文部科学省からの発信について』。



生徒の発想を地域の支援で具現化。 絶滅危惧種の保全に力を合わせる

岐阜県立羽島高校

取り組みの概要

岐阜県立羽島高校は、2021年度から3年次の選択科目「課題研究」で、地元の羽島市が力を入れる淡水魚「イタセンパラ」の保全活動に取り組んでいる。同魚は、同市に隣接する木曽川、大阪府の淀川水系、富山県氷見市の河川のみに生息する日本固有種で、国の天然記念物であり、絶滅危惧種にも指定されている。同魚の保全活動に十数年来取り組む「世界淡水魚園水族館アクア・トトぎふ」の池谷幸樹館長から、「まずは魚の認知度向上が課題」と聞いた生徒は22年度、以前新商品の開発に協力した地元菓子店「兎月園」と協働で、同魚をイメージした蒸し菓子を開発。水族館と同店以外の販路を模索していると、その活動に注目したテレビ番組の仲介で23年度、地元のプロサッカーチーム「FC岐阜」と連携することに。生徒が試合会場でコラボ菓子を販売したところ、150セットが3時間で完売。その成功をきっかけに、生徒から活動のアイデアが次々と出てきている。



地域の視点

高校生のアイデアと行動力で 魚の認知度向上に弾み！

イタセンパラの繁殖や啓発活動などを推進する池谷館長にとって、長年の課題は魚の認知度向上だった。

「イタセンパラは食べられませんし、川で見つけることも難しい魚です。啓発活動として市立図書館に魚を展示したり、小学校で講演したりしています。が、過性の活動にとどまっています」その課題に取り組んだのが、羽島高校の生徒だ。多くの人が手に取りやすいようにと、同魚をイメージした蒸し菓子を開発。蒸し菓子の表面には生徒が描いたイタセンパラのイラストを焼き印し、また、売り上げの一部が保全活動の資金に充てられるようにした。

「お菓子は水族館や郷土の土産になりますし、購入が保全活動の貢献になる仕組みはよいアイデアでした。宣伝効果が高く、認知度向上のキラーコンテンツになると感じました（池谷館長）その活動を知った地元密着型チームの「FC岐阜」が、試合会場内にコラボ菓子の販売場所を設置した（写真1）。自身も初めてイタセンパラを知ったと言う社会連携担当の鷺見有香さんは、「高校生と一緒に館長からイタセンパラの現状を学び、地域の自然を守る活動に意義を感じました。高校生の活動は地域の活性化にもつながりますから、今後も支援していきます」と語る。



写真1 試合会場では、コラボ菓子の販売に加えて、イベントステージでイタセンパラを大々的に紹介。PRのチラシ600枚を、親子連れが中心の来場者に配布した。



左から／池谷幸樹（世界淡水魚園水族館アクア・トトぎふ 館長）、鷺見有香（FC岐阜 社会連携グループホームタウンチームチーフ）

学校の視点

学校外の大人に認められることで
自信を持ち、自ら動き出す

市内唯一の高校である同校は、全国大会への出場実績がある吹奏楽部が地域の祭りで演奏したり、「Sクラブ」(＊1)が地域でボランティア活動をしたりと、主に課外活動で地域連携を行ってきた。そこから一歩踏み込み、生徒の学びに直結する地域連携を実践しようと、羽島市に相談してイタセンパラの保全活動に参画することにした。

「課題研究」の授業のみでの活動だったが、「F.C岐卓」との連携によって生徒の動きが活発になった。高校生とJリーグによる地域連携を紹介するテレビ番組で同校の保全活動が取り上げられ、生徒がオンライン出演。他の出演校の地域連携の内容に刺激を受けるとともに、テレビ局から紹介されたアドバイザーから、「君たちが動かないと始まらないよ」「アイデアがあれば実現を支援するよ」と声をかけられ、生徒は奮起。水族館を訪れてイタセンパラの生態などを改めて学んだ。課題研究担当の浦部陽先生は、学校外の大人から認められることで生徒は自信

を持ち、意欲がさらに高まったと語る。「イタセンパラの現状を自分の言葉で説明することができるようになり、『活動継続のために、子どもへの認知を広げたい』『子どもに分かりやすく説明するにはどうする?』などと、次々と意見を出すようになりました」



左から／中田啓士(教務部長、地理歴史・公民科【世界史】)、下野宗紀(校長)、浦部陽(進路指導部長、課題研究担当)

地域学校の視点

保全活動の輪を広げる中で
生徒の学びを深め、
地域の自然を守っていききたい

生徒指導が厳しい時期もあったが、地域連携が活発になってからは校内が落ち着いてきた。下野宗紀校長は、「学校外の人と接する際、生徒は自然と自分を律します。それが学習面にも好影響を及ぼし、週末課題も発展内容まで積極的に取り組む生徒が増えていきます。また、生徒や保護者の学校への満足度が向上しています」と成果を語る。

「1年次から取り組みればもっと発展させられる」といった声が生徒から上がっており、24年度は地域連携をさらに深い学びの場にすることを目指す。教務部長の中田啓士先生は、「地域から連携の依頼が増えている中、教育効果がより大きい活動となるよう、生徒が企画段階からかわる連携を強化したいと考えています」と展望を語る。



写真2 イタセンパラのPRチラシの内容を小さな子どもが理解できるようにと、美術部の生徒が紙芝居を制作(＊2)。それを教材にして環境教室を実施することも検討中だ。

イタセンパラの保全活動については、川の清掃活動や小学生向けの環境教室などを検討中だ(写真2)。生徒がコラボ商品として文房具のアイデアを話すと、驚見さんは「一緒に取り組めそうなパートナー企業があるので紹介しますね」と応えた。連携の輪が広がり、生徒の活動が活性化して学びが深まる。「長良川などを有する『清流の国ぎふ』の活動として発展させたい」と、生徒、教師、地域、皆が意気込む。

学校概要

設立 1921(大正10)年
形態 全日制／普通科／
生徒数 1学年約160人
担任 共学

2022年度卒業生進路実績 4年制大は、朝日大、岐阜協立大、岐阜聖徳学園大、金城学院大、相山女学園大、中京大、中部大、名城大などに延べ23人が合格。短大・専門学校学校進学41人。独立行政法人大学学校進学2人。就職49人。

＊1 主にボランティア活動を行う部活動。 ＊2 紙芝居は、『VIEW next ONLINE』でご覧いただけます。下記URL、または右の2次元コードからアクセスしてください。https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article18393/





寄付された食料品などを必要な人が自由に取りに来ることができるコミュニティフリッジ（公共冷蔵庫 写真右）。コミュニティフリッジのある倉庫内に設置されている「コミュニケーションボード」には、利用者からの感謝のメッセージが並ぶ（写真上）。

Who is this person?

支援を必要とする人が、人目を気にすることなく食料品や日用品を取りに行ける仕組みをつくった

1977年岡山県生まれ。森林にかかわる仕事を志し、高校では林業を学んだ。中国の砂漠緑化活動に参加したことがきっかけとなり、乾燥地研究センターを有する鳥取大学へ進学。在学中に森林保護やまちづくりに取り組むNPO法人を設立した。現在、一般社団法人北長瀬エリアマネジメント代表理事のほか、特定非営利活動法人岡山NPOセンター代表理事などを務め、「社会編集者」「社会の仕組み屋」として、まちづくりや社会事業の開発・経営にかかわる。2020年11月、個人や企業、商店などから寄付された食料品や日用品を、経済的に困窮する家庭など、支援が必要な人に提供する「北長瀬コミュニティフリッジ（公共冷蔵庫）」の運営をスタートさせた。



コミュニティフリッジには、冷凍・冷蔵食品以外にも、野菜や米、レトルト食品などが並ぶ。



倉庫は商業施設の駐車場の一角にあるため、人目につきにくい。24時間利用が可能。

一般社団法人北長瀬エリアマネジメント代表理事 石原達也

支援を受ける人とする人が、
顔を合わせない思いやりで
つながる「公共冷蔵庫」

モノと思いやりを循環させて、 人がつながる社会をつくる

「北長瀬コミュニティフリッジ」は、個人や企業などから寄付された食料品や日用品を保管し、それらが必要とする人に、必要な時に取りに来てもらう、「公共冷蔵庫」と呼ばれる仕組みです。

近年、離職や離婚、介護などの事情で経済的に困窮する人が増えていきます。特に、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で増加したのが、ある日突



私の高校時代

林業を学ぼうと思ったきっかけは、国立公園を守るレンジャーの紹介記事を雑誌で読んだことです。高校では農業クラブに所属し、農業鑑定競技会にも出場しました。また、課題研究では、壁面緑化をテーマとした研究に取り組みしました。

然職場が閉店・休業するなどして仕事がなくなり、収入が途絶えてしまった人たちです。そうした人たちにとって、支援を受けるために自分の窮状を他人に説明することは、精神的に大きな苦痛になることがあります。そこで、支援を受ける人と支援をする人が顔を合わせず、程よい距離感を保ったまま必要な支援が実現される方法を考えた末に、欧米で実践されていたコミュニティフリッジの取り組みを岡山で始めました。

北長瀬コミュニティフリッジは、登録した利用者が、食料品や日用品が置いてある無人倉庫の電子ロックをスマートフォンで解除し、24時間いつでも都合のよい時に利用することができるようになりました。食料品や日用品はバーコードで管理し、利用者はセルフレジのようにバーコードを読み取った上で品物を持ち帰ります。そうすることで、手間暇をかけずに在庫を管理することができのです。

食料品、そして衣料品や書籍など不要になったモノを地域で循環させることは、「誰かを助けたい」という気持ちで人と人をつなぎながら、フードロスや気候変動の問題をも解決する一歩になります。コミュニティフリッジ

は、どの町にもあつてあたり前のものになってほしいと思っています。

社会を変える一歩は 当事者意識を持つこと

最近、高校の探究学習にかかわる機会が増えています。1つ気になるのは、生徒が設定している課題の多くが、社会問題の解決と言いながら、社会の1員である自分とは距離のあるものになっている点です。貧困や格差、ジェンダー平等、脱炭素、どれも自分たちの問題として当事者意識を持つて考えてほしい。そして具体的な解決策を考えたら、必ず実験、試行してみてほしいと、生徒たちに伝えていきます。

私自身、当事者の声が反映される社会づくりに貢献したいという思いは、高校時代に育まれたように思います。入学時に制服のデザインが変わることになったのですが、その過程で生徒が意見を述べる機会がないことに私は疑問を抱きました。生徒会長になった私は、学校生活の当事者である生徒も学校づくりにかかわるべきだと考え、文化祭や生徒会選挙などの改革を進めました。今の高校生も、学校や地域の当事者として、「このままでは駄目だ」

と思っていることがあるはず。一人ひとりが当事者意識を持つて社会問題に向き合い、人を幸せにするためのアイデアを提案し合えば、社会はもっとよくなると私は信じています。私は福祉の専門家ではありませんが、コミュニティづくりの専門家として、コミュニティフリッジという仕組みで経済的に困窮している人を支援しようと考え、実践しました。様々な分野の人がそれぞれの視点で社会問題について考えることが、今後ますます重要になると思っています。



お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

次代を担う全国の若手教師が集まり、語り合う

若手教師・教育創造MTG^{ミーティング}

第2期

第2回 オンラインミーティング

ダイジェストリポート

2020年4月にスタートした、若手教師による対話のコミュニティ「若手教師・教育創造MTG^{ミーティング}」は、23年に新たなメンバーから成る第2期をスタートした。23年10月の第1回オンラインミーティングに続き、第2回オンラインミーティングを23年12月に開催。ここではその様子のダイジェストをリポートする。

第2回オンラインミーティングでは、メンバーの関心が高い「進路指導」「探究学習」「主体的・対話的で深い学び」の3テーマについて、各テーマ1人ずつ、代表メンバーが自身の実践を発表し、その後、質疑応答を行った。

「**進路指導**」のテーマでは、「才能を開花させる進路指導」と題して、新設された国際科の担任として指導した3年間の実践が発表された。生徒の思いを聞くことを重視した面談や、様々な人との出会いの機会を増やした結果、自分の考えを語れる生徒が増え、生徒と教師との間に進路に関する認識のずれが少なくなったことなどが共有された。

「**探究学習**」のテーマでは、「教科教育における『探究的な学び』とは」と題した発表で、教育の目的や国語の授業での実践を踏まえた、「探究的な学び」についての整理が提示された。そして、授業デザインの前に学びの目的などを明確にすることや、まずは探究的な学びを各教科で

実現することが大切ではないかといった提案がなされた。

「**主体的・対話的で深い学び**」のテーマでは、「『手段』としての『教えない授業』」と題した発表があった。3コマをひとまとまりとし、教師が提示する課題について生徒がペアで説明し合うことを通じて、生徒間の「つながり」をつくりながら、課題への理解を深めたり、新しい視点を獲得したりすることを目指す生物の実践が、実際の授業の様子とともに共有された。

各テーマの発表後の質疑応答は、発表を聞いたメンバーから、自身の実践や課題に引きつけた様々な質問が活発に出され、課題意識や実践のヒントを共有し合う時間となった。

ウェブサイト『VIEW next ONLINE』では、当日の発表内容や質疑応答の様子などを詳しく紹介したりレポートを掲載している。ぜひご覧いただきたい。

■ 第2回 オンラインミーティング概要

- ・実施日時 2023年12月26日(火) 17:00-19:00 (Zoom開催)
- ・プログラム 3つのテーマでの実践発表と質疑応答

テーマ	進路指導	探究学習	主体的・対話的で深い学び
発表内容	才能を開花させる進路指導	教科教育における「探究的な学び」とは	「手段」としての「教えない授業」
メンバーからの質問(抜粋)	面談でどのようなことを意識していたか	若手教師の先進的な取り組みをどう周囲に広げるか	グループワークが苦手な生徒への指導をどうすればよいか

第2回 オンラインミーティングの詳細リポートは、こちらからご覧ください！



VIEWnext ONLINE

URL <https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article18418/>





今号の取材で宮城県岩ヶ崎高校のある栗原市を訪れました。同市は移住・定住の推進で知られており、その中心となっているのが、同校の近くにある六日町通り商店街です。全国から視察が相次ぐほど、地元出身者と移住者が一緒に活気あふれるコミュニティを築いています。活気の源の1つに、岩ヶ崎高校との協力体制があります。「パイセン」と呼ばれる同校卒業生の地域コーディネーターが週に2日、進路指導室に在室し、生徒に地域の課題を共有することで、その解決への協力を後押ししています。廊下の掲示板には、商店街からの様々な依頼が貼られていました（写真）。

各校の地域連携の取材で教えていただきましたが、企画から参加できる依頼は高校生にとって成長の機会となり、人気があるそうです。地域連携は全国で増えました。地域に高校生をさらに呼び込むには、募集する大人の側が生徒の成長につながる提案をすることが重要だと感じました。（齋藤）

VIEWnext公式アカウント

LINE@

友だち募集中！



『VIEW next』のLINEを友だち登録していただければ、本誌の発刊時や新コンテンツの公開時に通知が届き、ウェブサイト『VIEW next ONLINE』内の該当記事に、ダイレクトにアクセスできます。この機会にぜひ、友だち登録をお願いします！

【友だち登録の方法】上の2次元コードを読み取っていただくか、LINEアプリの「友だち追加」>「ID検索」で「@view21」とご入力いただき、追加してください。

VIEWnext

高校版 2024年4月号

4月22日発刊

（予定）

『VIEW next』高校版は
年6回の発刊です。

Reader's VIEW

先生方からのご意見を
紹介します

2023年12月号へのご意見

ICTを活用した生徒への声かけを試してみたい

授業や事務処理において、ICTを日常的に活用するようになってきている。他校の様子や先生方の活用法を知ること、現場で生かせるヒントを多く得ている。12月号の特集の課題整理に書かれていた高知県・私立土佐塾中学・高校の藤澤佑介先生の実践を読み、課題進捗状況の一覧化をぜひ参考にしたいと感じた。教師側での把握に加えて、生徒への声かけに利活用できそうなので、早速試してみたい。

長野県 匿名希望

教師が新たなものを受け入れ、まずは使う大切さ

12月号の特集の課題整理を読み、埼玉県立朝霞高校 定時制課程の浅見かずとし和寿先生が実践していた、生成AIが作成した意見と浅見先生が作成した意見を生徒に示し、両者の違いに気づかせて、人間が考える意味を理解させることで、学習意欲を高めようとした取り組みは、生成AIをあえて利用した具体例としてとても参考になった。静岡県立静岡東高校の神谷隼基先生は、情報・データの利活用に関して、「変化を受け入れる姿勢が、学校には求められる」と述べていたが、教師が新たなものを受け入れ、まずは使ってみる姿勢が必要なのだと感じた。その上で、生徒が多様な友人や教師と話したり、学んだりすることで新たな気づきや学びを得て、豊かな人生を築き上げることができる場こそが学校であると、改めて考えた。

東京都・私立東京農業大学第一高校 小堀健一

「改善サイクルの速さ」という捉え方を校内で共有

12月号の特集の課題整理では、生徒に情報を吟味する力を養うことの大切さが議論されていた。静岡県立静岡東高校の神谷隼基先生が指摘していた「ゼロから何かを生み出す粘り強さは薄れている」という点は、同僚と度々話題になる。だが、神谷先生が同時に言及していた「改善のサイクルを速く回すことができる」という視点で捉えたことはなかったので、新鮮な感覚を覚えた。その捉え方を持つかどうかで、生徒へのアプローチや声のかけ方が変わらなうので、校内で共有したい。

静岡県立御殿場高校 松浦恵太

先進事例を基に、定期考査の廃止を前向きに議論したい

定期考査を廃止して、単元テストを実施することには賛成する。生徒が自分の得手・不得手をはっきりと知ることができ、長い目で見れば学習習慣が定着しやすいのではないかと考えるからだ。ただ、その話をすると必ず、「単元テストは全クラス一斉に実施できないため、問題があるのではないかと」といった意見が出て、私はそれに反論できずにいた。12月号の「指導変革の軌跡」の鹿児島県立与論高校の記事では、定期考査を廃止し、単元テストを実施するねらいを生徒に丁寧に周知することで、生徒の誠実な取り組みにつながっていると書かれていた。この先進事例を紹介すれば、定期考査の廃止と単元テストの実施について、前向きに議論できるのではないかと感じた。『VIEW next』高校版には、この事例を数年間追跡し、人事異動のある公立高校において定期考査を廃止した後のシステムを維持するためのノウハウをまとめることを期待する。

大分県立盲学校 堀 奈々絵

VIEWnext 編集部からのお知らせ

教育総合情報サイト VIEWnext ONLINE

おすすめ! ウェブオリジナル記事のご紹介

教育総合情報サイト『VIEW next ONLINE』には、『VIEW next』高校版の本誌連動記事のほかにも、ウェブ単独テーマを扱った記事や、研究会などのイベントの様子を紹介するレポート記事があります。多彩な記事を、ぜひご活用ください!

アクセスはこちらから!

URL <https://view-next.benesse.jp/view/cat/web/#main>

検索ワード VIEW next ONLINE

検索

2次元コード



下記の記事には、2次元コードからダイレクトにアクセスできます。

ウェブ単独テーマ記事

高校に広まる定期考査廃止の動き — そのメリットと課題を考える —

近年、全国の高校で、定期考査（中間考査や期末考査）の廃止の動きが広がっています。記事では、鹿児島県の2校の公立高校の事例や全国の状況を踏まえ、定期考査を廃止することのメリットと課題をまとめています。



人生を切り開く 10分間の「学び直し」

新学習指導要領では、生徒の資質・能力の育成にあたり、必要に応じて、義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るための学習機会を設けたり、学校設定科目を履修させたりすることを求めています。学び直しの推進に尽力してきた教育者に話を聞きました。



イベントレポート記事

先の見えない時代を 生き抜く上で求められる、 非認知能力の育成について考える — 研究会レポート —

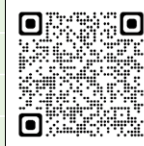
国際的にも注目が集まっている「非認知能力」。非認知能力とはどのような力で、どうすれば育成することができるのか。そのヒントを探る研究会をベネッセコーポレーションが開催しました。その内容をレポートしています。



探究を深める 校内体制のつくり方と 教師のかかわりとは

—「探究フォーラム2023」レポート—

千葉県・私立芝浦工業大学柏中学校高校と、東京都・私立神田女学園中学校高校が共催した「探究フォーラム2023」。生徒の興味・関心の広げ方や、探究学習を推進する上での校内体制のつくり方などについて意見交換された様子をレポートしています。





生徒と創る学びの情景

答えは「きみ」の中に見つける

大分県立大分上野丘高校 遠山里織先生



目の前の生徒をしっかりと見つめ、生徒が必要とする授業、支援を行うことを大切にしている遠山先生。1年次であっても、授業で問題を解く際に制限時間を設けるのは、高い目標を持つ生徒たちに、大学入試本番で最高のパフォーマンスを発揮してもらいたいから。「1回授業を欠席しただけでも大きな損をした気持ちになる」と生徒が言うほど濃密な授業を展開する遠山先生だが、生徒の人生で大切なものは学校だけではないと考える。勉強と校外活動に全力を傾ける生徒から、「理由もないのに涙が出そうになることがある」と相談を受けた時は、「食べてる？ 眠れてる？」と体調を気遣った上で、「しんどい時は私の授業で休憩すればいいよ。分からなくなったら、後で教えるから安心して」と、頑張り過ぎて疲れた生徒の心に寄り添う。その後、自分のペースを立て直した生徒は、「あの時、先生に自分を肯定してもらえたような気がしたし、元気が出た」と振り返る。「高校生の内面は日々流動的で、そして1人として同じ生徒はいない。だから、『こうあるべき』といった思い込みに縛られずに、目の前にいる生徒に合わせて柔軟に対応できる教師でありたい」と遠山先生。その目に映る生徒とともに、遠山先生も日々成長を続けている。

とおやま・さおり 同校に赴任して4年目。国語科主任。進路指導部。2年生担任。

大分県立大分上野丘高校 1885（明治18）年設立／全日制／普通科／共学／1学年約320人／2022年度卒業生進路実績 国公立大は、北海道大、東北大、東京大、京都大、大阪大、九州大などに198人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ163人が合格。

お客様サービスセンター

フリーダイヤル 0120-350455 [受付時間] 月～金8:00～18:00／土8:00～17:00（祝日、年末・年始を除く）

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17